

子規會誌

一五一号

平成二十八年
十月

第一一五回子規忌並びに物故会員法要……………事務局：一

仙波花叟 ―子規からの激励の手紙……………松浦卷夫：三

正岡子規と本田種竹……………寫川武彦：一八

大原其戒の句 〔『眞砂の志良邊』より〕(続編)……………森 慎 吾：二六

検証！

愚陀佛庵所有者の変遷と子規漱石遺跡保存について……………二 神 將：三六

第一一五回子規忌 献詠作品……………事務局：四四

〔短信〕〔訂正〕……………編集部：四七

例会 記録

○平成二十八年七月例会（第八八二回）

七月十九日（火）松山市立子規記念博物館 出席者三十四名

講演「子規と三津浜」

経理部長 森 慎吾

三津の地名の由来と三津浜港の発展の状況について触れた後、子規の祖父・大原観山及び父・常尚ともに三津に深い縁があり、子規は明治二十年七月に大原其戎を訪ねたことを含め四十回近く三津を訪れたことを説明、三津の俳諧の歴史と潑々園での十数回の句会、子規の三津を詠んだ俳句や短歌をについて森元四郎「椿守り」や古地図等を基に検証、文学の香り高い三津を紹介された。

○平成二十八年八月例会（第八八三回）

八月十九日（金）正宗寺本堂 出席者二十七名

講演「近藤我観について」

会員 近藤 元規

冒頭で我観の教職を中心の経歴を紹介、初期松風会の会員として活躍に加えて、新聞「日本」や「承露盤」、海南新聞等に掲載の俳句、自筆俳句稿本について詳述。さらに漱石との深い交友の状況や後年に癸丑吟社を設立主宰したことも述べ、「散策集」の保管のこと、終戦直後漱石の半折を外地から無事持ち帰ったエピソードなどを含め、祖父近藤我観の生涯を、親しみを込めて語られた。

○平成二十八年九月例会（第八八四回）

九月十九日（月）正宗寺本堂 出席者三十八名

講演「子規の『東京松山比較表』」

副会長 今村 威

子規が「筆まかせ」の中で、明治二十二年すでに文章改革を意図していたことに触れた後、第一編「松山会」で発表の「東京松山比較表」を紹介。「宮城―松山城」をはじめ六十八項目の比較が、それぞれ興味深い共通点によって対応されており、松山の文化のレベルを実感させる子規のジャーナリスト的な視点と、東京の景物からも、故郷を偲ぼうとする郷土愛が表れていることを立証された。

例会 案内

○十一月例会

平成二十八年十一月十九日（土）正宗寺本堂

講演「子規と小鳥」

評議員 忽那 哲

○十二月例会

平成二十八年十二月十九日（月）正宗寺本堂

講演「時代を刻した俳人・松瀬青々

―子規・虚子とともに―

○一月例会

平成二十九年一月十九日（木）石手公民館

新年懇親会

事務局長 烏谷 照雄

第一一五回子規忌並びに物故会員法要

事務局

子規没後百十五年を迎えて、子規忌並びに物故会員の法要が平成二十八年九月十九日(月)午後一時三十分より正宗寺において三十八名が出席して行われた。

一 墓前祭 子規埋髪塔前

○読経 正宗寺法務統括住職 田中義雲師

○献詠披講 松山子規会経理部長 森 慎吾

一 本法要 正宗寺本堂

司会 松山子規会庶務部長 寫川武彦

○法要読経 正宗寺法務統括住職 田中義雲師

○子規遺作朗詠 松山子規会経理部長 森 慎吾

〔絶筆二句〕

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水も取らざりき

○献詠作品朗詠 松山子規会経理部長 森 慎吾

(作品別掲)

○焼香 正岡家ご遺族 平松丑雄様

松山子規会会長 井手康夫

一 講演「子規の東京松山比較表」

松山子規会副会長 今村 威

一 閉会あいさつ 松山子規会会長 井手康夫

◎ 記念写真撮影

【法要供物】

・温泉煎餅 玉泉堂様

・清酒・柿・梨・あけび・鶏頭・菓子(土佐かんさし) 浅海好美様

【会長あいさつ】(要旨)

本日は台風接近の中、多数の皆様にご参集いただき、ありがとうございました。子規忌並びに物故会員法要が無事に終わりました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

来年は正岡子規生誕百五十年、十年掛かりで編集してきた「子規事典」も、最終段階に入っております。完成すれば、販売につきましても皆様のご協力をお願いいたします。



第115回 子規忌記念 平成28年9月19日 於 正宗寺



本法要



子規埋髮塔



墓前祭

仙波花叟 — 子規からの激励の手紙 —

松浦 卷夫

はじめに

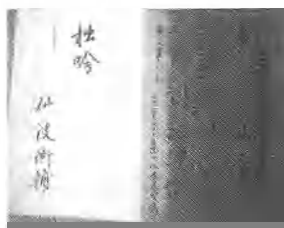
「明治二十七年八月始めて斯道の山踏みをなし翌二十八年冬十二月頃に喜安氏の紹介により高浜虚子氏の添削を乞ひ二十九年十一月より新に内藤鳴雪先生の評を受け三十年三月一日より子規先生の評定を受くることとなる。

(明治) 三十年四月二十日爲後日記憶花叟識之

笹鳴集第壹巻の表紙裏に花叟自身が自署している。この笹鳴集は子規の朱が入ったまま保存され、まだ出版されていない。「ゆみそ」については、風早吟社創立五十周年記念行事としてその生みの親、育ての親である花叟の句集が出版されている。その中に、虚子、鳴雪、子規の添削、批評文が紹介されている。そして子規から花叟宛の激励の手紙も掲載されている。そこには俳句道の厳しさと花叟への深い愛情がある。越智二良先生の言葉を引用すれば、「シシが子を谷に突き落とすように」将来の大成を期しての叱咤激励であろう。

短い期間ではあったが子規から直接指導を受けた花叟は

子規のあまりにも早い逝去に悔やんでも悔やみきれない想いを抱ていたようだ。その想いを入手でできた資料を通して確認し、子規との関係を明らかにしたい。



笹鳴集第壹巻表紙裏



仙波花叟



第二巻表紙裏

三月一日正岡先生ニ刺ヲ呈シテ添削ヲ乞フ



笹鳴集第壹 第二

一、仙波花叟の略歴

明治七年 (一八七四) 六月二十七日生まれる。本名

衡輔。

愛媛県風早郡河野村大字常保免十四番戸

(現松山市)。

明治二十三年 (一八九〇) 十六歳 伊予尋常中学校入学。

友人に喜安璣太郎、曾我部一郎、景浦直孝等あり。在学中回覧雑誌を編集す。「逞文学会」を興し、「文学の葉」を出す。

明治二十五年 (一八九二) 十八歳 四月伊豫尋常中学校中

学科五級終業。この夏、帰省中の正岡子規に乞ひ文學講演会を開く。

明治二十六年 (一八九三) 十九歳 六月、県松山養蚕傳習

所を卒業。

明治二十七年 (一八九四) 二十歳 喜安璣太郎の斡旋で高

浜虚子に指導を受く。

明治二十八年 (一八九五) 二十一歳 四月十六日付にて河

野尋常小学校准教員となる。

明治二十九年 (一八九六) 二十二歳 高浜虚子の奨めによ

り内藤鳴雪の評を受く。

明治三十年 (一八九七) 二十三歳 『ほとゝぎす』創刊号

に十三句掲げられる。

三月一日、内藤鳴雪の奨めにて正岡子規の教えを受くることになる。

三月十五日、「日本」紙上、子規「明治二十九年の俳諧」において、『花叟―雋永』の評あり。

明治三十一年 (一八九八) 二十四歳

明治三十二年 (一八九九) 二十五歳

夏、脚氣を病み、不眠症に陥り、不眠のまま頭沓えて句作に耽る。

子規病重く、村上齋月の教えを受く。

明治三十三年 (一九〇〇) 二十六歳 十二月一日付にて教

員退職。

明治三十四年 (一九〇一) 二十七歳

一月四日付にて伊豫農業銀行に入社する。

明治三十五年 (一九〇二) 二十八歳

九月十九日、子規永眠す。

花叟の「子規先生十三歳の時の書簡」が「子規追悼集」ホトトギス第六巻第四号(明治三十五年12月25日発行)に掲載される。

明治四十二年 (一九一九) 三十五歳

花叟の子規の印象「四国文學」に掲載される。

明治四十四年 (一九二一) 三十七歳

伊予農業銀行、北条出張所を開設、その主任を命ぜられる。

大正四年

(大正八年に支店昇格、その支店長となる。)

(一九一五) 四十一歳 十一月四日、「時雨吟社」(のち風早吟社)を興し、北条風早の俳壇を育成。

昭和三年

(一九二八) 五十四歳 十月 西ノ下大師松の下に虚子の「この松の下に」の句碑建立に尽力。

昭和五年

(一九三〇) 五十六歳 九月、芸備銀行を定年退職河野村に家居す。

昭和八年

(一九三三) 五十九歳 「講習会の子規先生」を「鶏頭 子規号」に掲載。

昭和十五年

(一九四〇) 六十六歳 三月二十五日、穿孔性腹膜炎にて死去。

二、子規の文學講演を聴く

柳原極堂が景浦直孝(稚桃)の「居士思出座談会」を引用して「明治二十四年の夏八月二十六日であった」としている。その日付について「仙波花叟は講演は八月でなくて七月であったと記憶する」というので景浦氏に再考を求めると「サア判然と證據立てる資料はないが、八月の上旬であった

かも知れぬ七月ではないやうに思ふとの答へで月日は正確でないとして柳原は「居士は八月二十五日の正午頃に三津を出船して歸京の途に就いているから、八月二十六日に禮に行つたといふ景浦氏の説はうけとり難い。」としている。景浦氏は「正岡子規五十年祭記念」で「子規居士と松山退文學會並に松風会」と題してその思い出を述べている。それによると、「恰も、明治廿五年夏でありましたが、当時帝國大学生であつた子規居士が松山に帰省せられました。之を幸に我々は何か面白いお話を聞きたいと退文學會主催の文學講習会を開きたい旨お願いして、その快諾を得て遂にその実現を見た」とあり、喜安氏が、「子規の思い出」の中で、文學講演会の開催年について虚子に照会して「子規があなた方の爲に文學談をしたというのは明治廿五年であつたやうに記憶しております。」という返事を受け取つたということ、明治廿五年に落ち着いたのである。

1 「子規と其郷里松山(二十二)」柳原極堂(談)

數年前、大阪毎日の松山支局が主催となつて、居士思出座談會を開いた節、景浦直孝氏は曾て居士に請ふて五日間の講演會を催ふし、其の文學談を聴きし思出を語られた。其の後虚子氏著「子規居士と余」を繙きしにそれにも居士が講師となつて文章談を試みしやうに書かれてゐる。蓋し同一事件をいつたものであることは明である。景浦氏の思出

は次の通りである。

『明治二十四年の夏居士歸省の節、私は同じ松山中學の同窓である喜安璣太郎君（今の英語青年の主幹）と共に、居士を中の川の其の宅に訪問した。其の動機はどんなことであつたかハッキリ分らぬが、文學に造詣の深い先生が歸省されたといふ風に、誰からか聞き込んだためであつたやうに思ふ。戸口を入つて案内を乞ふと、一人の婆さんが出られた。

「正岡先生はおうちですか」といふと「まだ寝てゐます」と答へられた。母堂であらうと氣がついた。「それでは復た出直すことに致しませう」と一足歸りかけると、蚊帳の裡から「何か用事かな」といふ聲がした。「少しお話を承りたいので参りましたが」と答へると、「さうかなそれならお上がりや、まだ食事はしてゐないがそれはかまはんからお上り」といつてやがて座敷に通された。私共が居士と初面會は此の時であつた。其の時分博文館から日本文學全書が出版されてゐたので、我々はそんなものを頻りに讀んで、文學研究者のやうな氣をしてゐた頃のことである。「話とはどんな話ぞな」「文學の御話です」「そりや面白い。ヨシ僕の知つてゐるだけのことは話してあげる」といつて、居士は一席の文學談を親切丁寧に試みられたが、それが非常に面白く又有益であつたので、一應歸宅の上喜安君と相談して再び居士の處に出かけ、數日問ひきつづいて文學の講

演をお願いする譯にまゐるまいかと懇請してみたところ思ふより産むが易いの諺の如く「やつてあげるところじやない」と快諾されたので、二三十人の聴講者も募り、講演會の準備も成つた、會場は高等小学校の教室の一部を借り入れ、居士に文學談、渡部明綱先生に文章規範の講義を願ふことにした。會期は五日間であつた。居士の講演は「文學とは何ぞや」といふ題で、其の梗概は、獺祭書屋俳話などで後日我々が見たやうなことを語られた。和歌俳句の生命論などもあつたと記憶する。當時世上に喧傳された盛名のあつた小説家の文章を批評し、村上波六の代表作「三日月次郎吉」や「奴の小萬」などを俎上にあげて、こんなものは浪花節の少し高尚なものだ。斯種の小説が興味をもつて讀まる、のは、畢竟我が日本文學の幼稚なことを物語るものであるとまで切言されたのを覚えてゐる。講演が終つた時、會員から三十錢づゝ、醸出させて、菓子と鶏卵を手土産に挨拶に行つた。それは八月二十六日であつた」

（大毎新聞に掲げられし座談會筆録に據る）

當時會員の一人で、松中の生徒であつた仙波花叟氏は、右講演は八月でなくて七月であつたと記憶する旨を語る。之を傳へて景浦氏の再考を求めたが、サア判然と證據立てる資料はないが、八月の上旬であつたかも知れぬ。七月ではないやうに思ふとの答へで、月日は正確でない。居士は八月二十五日の正午頃に、三津を出船して歸京の途に就いて

いるから、八月二十六日に禮に行つたといふ景浦氏の説はうけとり難い。

(鶏頭七月号・昭和9年7月1日発行)

2 子規居士と松山逞文學會並に松風會 景浦 稚桃

憶ひ返せば、随分古いことで、今から約六十年前の話であります。私はまだ小学校の生徒であつた時、親友喜安瓏太郎君や、篠原誠一、檜垣光一、仙波花叟、田所成恭君等と共に、逞文學會を組織してゐました。其の始めは各自の作つた文章や詩歌を毛筆で書いて、之を綴り合せて、回覧するに過ぎなかつたのですが、後我々が中学校に入学してから之を印刷に附して「文学の葉」と題し、會員間に頒布することにしました。そこで、明治廿五年の夏頃には其の第卅一号を發刊する運びとなりました。恰も、明治廿五年夏でありましたが、当時帝国大学生であつた子規居士が松山に帰省せられました。之を幸に、我々は何か面白いお話を聞き、併せて、之を雑誌「文学の葉」の資料にしたいと考へ、当時中学の友であつた喜安君と同伴して、居士のお宅……湊町四丁目中ノ川筋興禪寺の向ひで、子規居士上京後母堂と令妹とが居住せられた家……を訪づれて、色々有益なお話を聴きました。其のお話の面白さに、我々は逞文學會主催の文学講習會を開き、居士を講師と仰ぐことにして、其の快諾を得、遂に其の実現を見たのであります。併

し此のことの詳細は後段に述べることにします。

(正岡子規五十年祭記念「昭和二十七年一〇月三二日発行」)

3 子規の思い出 喜安瓏太郎

(前略)間もなく私は松山の伯母のところに預けられ松山高等小学校に転校した。ここで景浦直孝や仙波花叟氏等と心易くなり、逞文學會を興し回覧雑誌を出して居たが、とうとうそれを印刷するようになり「文学の葉」といつていた。主として私が編輯して居たが四五年も続き私が中学五年のとき松山中学から出て居た「学園」と合併し同誌の一欄に「文学の葉」を置くこととなつた。——略——

廿五年の夏も子規が松山に帰省することを私は同級の河東碧梧桐から聞いて、今度こそ子規に会いたい、話も聞きたい、話を聞くなら多くの人が聞くがよい、それには會を開くがよいと思ひ景浦氏等と相談して逞文學會の事業として八月一日から松山高等小学校に夏期講習會を催し、——略——子規が帰松するとすぐ景浦氏と共に訪問して講演をお願いした。快諾を得て會員募集の広告をした。會費は十錢であつた。——略——

八月一日逞文學會の夏期講習會が始まつた。會員は二十名ほど集まつた會費は総計二円ほどでこれで三講師に謝礼するといふのであつた。講師控所も設けもせず、講師を聴講者に紹介することもせず、後で考えてみると不都合なこ

とばかりであった。とにかく子規の講演も終った。私は子規の講演の一部を筆記して子規の訂正を願った。悪筆悪文であり、聞きもらし聞き誤りも多かつたろう。東京から送り返されたものを見ると、私の筆記は殆んど全部消されて朱筆が一杯入って居た。子規の文と言つて差支ないのであった。——略——

子規は講演のことを何も書き残してないが、——略——虚子は昭和十七年に出した「俳句の五十年」にもこの講演のことを書いて居る。柳原極堂の「友人子規」には景浦直孝翁の思出談を引いて、子規の講演を二十四年の夏のこととして居るが、私は色々の点から考へても二十五年の八月に相違ないと思ふ。私は念のため虚子に照会して「子規があなた方の爲に文学談をしたといふのは明治廿五年であつたやうに記憶しております」という御返事に只今接したのであつた。

(正岡子規五十年祭記念「昭和二十七年一〇月三十一日発行」)

三、「ほとゝぎす」創刊號(明治三十年一月)に花叟の

句十三句

「ほとゝぎす」創刊号は明治三十年一月十五日 海南新聞(現愛媛新聞)社員であつた柳原正之(極堂)が松山で創刊。雑誌名の「ほとゝぎす」は正岡昇の俳号「子規」に因んだ

もので、創刊時ひらがなで「ほとゝぎす」としていた。選者は正岡子規、高浜虚子、河東碧梧桐、内藤鳴雪、村上霽月等が中心であつた。その創刊号に仙波花叟の句が十三句選ばれている。子規選が十二句、鳴雪選が十一句。両者の選んだ句は殆ど同じであつて鳴雪の選んだ句の中に一句だけ子規が選んでない句がある。そのため実質的には十三句ということになる。子規と鳴雪で評価が異なっているのは俳句の面白さであろう。

題は 時雨 千鳥 蒲団 正岡子規宗匠選

五等 1 見返れば 大比枝小比枝 時雨けり 花叟

2 加茂川に 千鳥聞く夜を 袖香爐 全

3 夕月に網干か浦の ちとりかな 花叟

4 處々わたの切れたる ふとんかな 全

5 垢つきて つめたくなりし ふとん哉 全

四等 6 傘さして 其處行人を時雨けり 花叟

7 三井寺の 鐘に時雨る、湖水哉 全

8 大船を めくりて月の ちとりなく 全

二等 9 松伐て 淋しき庵の しぐれかな 花叟

10 金屏に 灯くらし 釣ふとん 全

11 きぬふとん 妹か寐顔の 美しき 全

四等 12 いつれ頭 ふとんの中の 君にとふ 全
内藤鳴雪宗匠選

1 處々 綿の切れたる ふとん哉 花叟

2 関守の 月に寝ぬ夜を 千鳥かな 全

3 大船を 月にめぐりて 千鳥啼く 全

4 傘さして そこ行く人を時雨けり 全

三等 5 絹蒲団 妹が寝顔の美しき 花叟

6 夕月に 網干か浦のちどりかな 全

二等 7 いつれ頭 ふとんの中の 君に問ふ 花叟

8 金屏に 灯火くらし 釣りふとん 全

9 加茂川に 千鳥聞く夜を 袖香炉 全

一等 10 見返れば 大比枝小比枝 時雨けり 花叟

11 松切つて 寂しき庵の 時雨かな 全

四、子規からの激励の手紙

次の一文は本文冒頭の「はじめに」で引用したものであるが再度挙げる。この文に続く虚子、鳴雪、子規の評は「笹鳴集」に直接書き留められたものである。

笹 鳴 集 第一 表紙裏に書かれている文章

自 明治二十九年 四月
至 全 年十二月

明治二十七年八月始めて斯道の山踏みをなし翌二十八年冬十二月頃、喜安氏の紹介により高浜虚子氏の添削を乞ひ二十九年十一月より新に内藤鳴雪先生の評を受け三十年三月一日より子規先生の評定を受くることとなる。

明治三十年四月二十日

爲後日記憶 花叟識之

「子規からの激励の手紙」をもらうに至るまでには虚子、鳴雪そして子規の添削指導がある。虚子の選評を見ると「思想やや陳腐やや平凡、従つて用語たる活動少なきによる」とあり、半年後には「一も苦吟のあと見え唯唯思ふがままを吐出するに過ぎざるが如し、・・・」

進歩の第一要素は苦吟にあり、苦吟とは一字をいやしくもせざるにあり」と述べ、後に挙げる子規の「一句一句煉りに煉りたる」に通じるものである。

鳴雪は「けだし天才余りありて修練未だ足らず之をつとめよ」と評価しながら、一層の努力を促している。

子規の添削に至っては「揃つて句になること御手際感服」とか「日本」へ投寄の句を見て「ひそかに望を嘱す」と期

待の意を示しながら、添削句について「古文や新聞雑誌の句の口真似」「同じ句が三ツも四ツもある」と初心者の陥り易い欠点弱点を容赦なく突いている。

以下に笹鳴集の中に朱書されている虚子、鳴雪、子規各先生方の批評を転記する。

明治二十九年五月二十九日虚子先生選評

右の數句を見るに欠点あるものは少なくして僅かに△を附せる位に過ぎず、しかれども面白き句ともいふべきものも亦○を附せし以外に出でず、これ要するに思想やや陳腐やや平凡、従つて用語たる活動少なきによるなるべし、希くは今一躍一突進を起すべき時たるに注意あれいでや春季以下を見ん。

明治二十九年十月二十九日 虚子 妄批

君が句作を想像するに一も苦吟のあと見えず唯思うがままを吐出するに過ぎざるが如し、斯くの如きは非常の天才に非るよりは決して進歩すべきに非ず。進歩の第一要素は苦吟にあり、苦吟とは一字をいやしくもせざるにあり、一句を重んずること珍宝の如きにあり、苦吟するものに決して多作せず、故に句に重み生ず推敲の故事を思へば又翁

が一句の主たることは難しいひしことを思へば百千の凡句を並列するよりも一の好句の主たることを思はざるべからず、君若し一の趣向を得んか直ちに兩三の句になすことを止めよ。五日を費やすも可なり十日を費やすも可なり推敲又推敲唯一の完全なる句となせ。十の相似たる句を得んか選択自ら其秀でたりと信ずるもの唯一句を取つて之を再吟再考せよ。余は嘯目して次便の稿に甘露一滴の妙句を見んことを樂しむ。

雲の峰城の太鼓の八ツ下がり を以て圧巻となす。

泥船に水たまりけり五月雨 平凡にて好句なり。

明治二十九年十月二十九日 虚子 妄批

x

匆々被閱商量当を失するものあらん幸に宥恕あれ虚子子は進取に傾き僕は保守に傾く、取る所の標準定めて異同あらん、是れ亦一粲。

頃日多忙此卷完璧遅々 深謝する所なり

明治二十九年十一月尽日 鳴雪 拝

全卷面白き句甚だ多し而して俗事俗況も風雅の興なきものも亦少なからず。けだし天才余りありて修練未だ足らず之をつとめよ。

此巻封紙を開くとき誤て表紙を損せり爲に改装す幸恕。

明治二十九年十二月二十四日朝 鳴雪 拝識

才藻富澹詞筆活動往々人をして瞠若措かざらしむ若し之に精練の功を加へば其造詣実料るべからざるものあり自愛自重

明治三十年二月十八日 鳴雪 老生 拝

笹鳴集 第二

自 明治三十年一月
至 同 年十二月

三月一日正岡先生に刺を呈して添削を乞ふ

揃つて句になること御手際感服併しこれといふ佳句は一
首も見えぬは如何沢山作るとは小生の賛成する所なれと
も古句又は新聞雑誌の句の口真似をするのみならば沢山作
りたりとも何の益にもたたぬなり。それは作るといふもの
にあらずぬすむといふものなり、況して自分の句の中に同
じ句が三ツも四ツもあるやうでは表面だけ沢山あるやうに
見せて其の实同じ句を並べたるをや沢山作ると称して自分
が前にどんな句を作りしやら知らぬやうでは到底何万首作
りたりとて上達する氣遣ひなし小生も同じやうな句に幾度
も点ずるは誠に面白からず感ずるなり沢山作るとて句を鹿

末に作るやうなれば一句を念入れて作るに如かず今貴稿を
見るに始の方は稍丁寧に書きて後の方は粗雑になり居るな
り。是れ俳句を認めるに飽きて無理に書き流したるものに
して俳句の龜末なる証拠也、若し一句一句煉りに煉りたる
句ならば終に至りて龜末に浄書するが如きことあるべから
ず。貴兄は左様に龜末な句を作りて何が故に小生の点を乞
はるるや或は句を上達せしめんとの主意にはあらで単に点
を得るがためなりや然らざれば同じやうな句を二ツも三ツ
も記したり人の焼直しを羅列して見せらるる筈なければな
り 昨秋「日本」へ投寄の句を見てひそかに望を囑す
今日此の貴稿を見て其の墮落に驚かずんばあらず 噫

根岸庵褥中にて

病子規 識

明治三十年三月十四日

(句集「ゆみそ」)

次に仙波衡輔(花叟)宛に届いた子規の手紙を挙げる。
子規の添削の日付は明治三十年三月十四日である。そして、
手紙の日付は翌三十一年の二月一日となつてゐる。

添削では句作への姿勢を強く細かく注意していたが、手
紙では「上達たのもしく」「進歩に驚き候」と褒めて「天狗
になられては九仞の功を一簣に欠く」と慢心を戒めて釘を
刺すあたり心憎いばかりの配慮である。

仙波衡輔宛

伊豫國松山紙屋町伊豫農業銀行内

〔封筒款〕

東京市下谷區上根岸町八十二番地

〔自筆〕

時々日本への投書として玉句小生迄御恵投被下
度候

啓 頃日御句新聞紙上にて拝見致候處非常の御上達たのもしく存候 あれ位御上達ならハ小生等拝見致候にも力ありておもしろく候 乍併これ程御上達ならハ拝見せずともよろしく自ら御研究御怠りあるまじく候 今日も碧梧桐参り御句の噂致候ところ同人も貴句のほと、ぎすへ投稿のものを見て進歩に驚居候 兎に角此の機はつさず御練習可被成候 田舎人ハ兎角小成に安んずる風あるに貴兄の獨り進歩せらる、ハたのもしけれとさりとして、で天狗になられてハ九切の功を一簣に缺くものに候 今一步の處さへ力を入れて御ふんばり可被成ぐるり平凡俳人などにハかまハす東京の大家と直ちに競争する積にて御工夫可有候 小生等がほめたなどとして決して自慢がましきことハ御吹聴被成間敷候 若シ萬か一にも一點の慢心起り候ハ、俳句の進歩ハそれが最期にて却而退歩可致候 失敬な申分なれとも御進歩のたのもしさに行末の氣にか、りたるために思ふこと皆うちあけて申上候 あしからず御

諒察被下度候 返すくもこの處でつまづかぬやう

千里の先を目あてにして氣長く御進ミ可被成候 不盡

(明治三十一年)二月一日

子規

花叟様

〔仙波花叟は松風會會員。「ホトトギス」第十二號(明治30・12・30)子規選募集 俳句「寒菊」では一等七人のうちの一人に選ばれている。遺稿集「ゆみそ」がある。〕

子規全集第十九卷

五、俳人仙波花叟を語る

花叟、三十三回忌に当たつて「仙波花叟を語る」と題して愛媛新聞が昭和四十八年七月六日(金)七日(土)の二日間掲載したものの一部を紹介する。花叟の長男である仙波共平さんの身近に見た花叟、当時子規会の会長であつた越智二郎先生の花叟観が語られており、貴重な資料と言えよう。

子規の激励で精進

越智 この時、虚子の指導を受けていたが、新聞「日本」へも投句していた。明治三十年の子規からの手紙によると『昨秋、日本へ投寄の句を見てひそかに望みを囁(しよく)していた』とある。二十九年の

秋には投句していたことになる。

仙波

虚子との最初のつながりは、東京にいた友人の喜安進太郎（英文学者）さんからののがきによると、今こちらでは俳句というものが盛んだということや虚子のことも書いてある。父はその喜安さんを通じ虚子を知った。

越智

明治二十七年というとき虚子が子規の指導をうけ、ぼつぼつ俳句にはいりはじめた時分ですね。

仙波

虚子には四、五回見てもらつて虚子から鳴雪を紹介された。鳴雪に見てもらつている間にお前はもう俳句の大学へ行け、と子規を紹介された。

越智

これが明治三十年三月からです。しかしそれ以前から子規は新聞の投句で花叟の名前を知っていた。というのは二十九年の『俳句界』で花叟の句をとりあげている。『食へもせぬ葺たくさん生えにけり』などは『日本』に載つたものの中から選んだ。

広田

『花叟雋永（―せんえい）』というはその時の評でしょう。

越智

そうですね。むずかしい字なんですけど、うまみのある句を作っているということでしょう。

―略―

越智

ここでいいたいのは子規が花叟を育てるためにいかに心を用いたかということです。花叟への手紙や句

稿の中でたくさん句を作るのは賛成だがいたずらに駄作を作るのは無意味だ。粗末なものをたくさん作るよりは念を入れた一句を作れとか原稿など見ると初めはていねいに書いてるが、しまいはぞんざいになってる。これは俳句をそまつに扱ふことだなど非常にやつつけている。シシが子を谷に突き落とすように初めはつきはなしているが、次の手紙には立派だとほめていたりする。また田舎の人は小成に安んずるととかくテングになるから…とか平凡な俳人にかまわずに中央の大家と競争するようにくふうしろというふうに激励している。このように子規は温かい心遣いときびしい手を加え花叟の指導にあつた。たいていの人は、ぺしゃんこになるところをやめずに勉強を続けたのは花叟のえらいところだ。というのは明治三十一年の俳句界には、伊予から柳原極堂、村上霽月、野間叟柳、花叟らの名前があるが、翌年になると伊予からは花叟一人だけが選ばれている。彼だけが『日本』へ投句を続けていたからだろう。私は花叟、霽月、叟柳らが都会へ出て職業俳人にならず、地方の俳人として終始し、田舎俳人だが余暇、レジャーとして俳句を楽しみ後進を育てた功績は大きいと思う。これが伊予の俳壇を隆盛にしたし、豊富にする土台になったことを忘れて

はならない。

—略—

広田 明治三十二年霽月を知るきっかけは—。

仙波 親類が今出にあつたのでその関係でしよう。叔父の紹介で霽月の伊予農業銀行へ採用されたということ
です。

広田 銀行への入社は—。

越智 明治三十四年ということだが、三十年の極堂の手紙

も、子規の三十一年の手紙も銀行あてになっている。
当時教員のはずだしはつきりしない。

広田 正式に入社の辞令があるのは三十四年だが、それ以前に銀行と何か関係があつたんでしょう。

有馬 三十二年子規病重く、霽月の指導を受く、となつて
いる。

仙波 病気が重いので子規への送稿はやめたといつていま
した。(以下略)

愛媛新聞 昭和48年7月6日(金)「俳人仙波
花叟を語る」

出席者 有馬白陽(仙波花叟門人) 越智二良(子規会

会長) 瀬戸丸毛人(仙波花叟門人)

仙波共平(仙波花叟長男) 司会 弘田義定

(歌誌「愛媛アララギ」主宰)

六、花叟の「子規先生」への想い

花叟が書き記した子規への想いは、現在掌握しているものは次に挙げる三つである。

「ホトトギス」子規追悼號に寄せている一文、花叟が引用している安倍國手への子規の手紙は原文では、送り仮名、助詞、助動詞はすべてカタカナである。

1 子規先生十三歳の時の書簡

伊豫松山 花 叟

十月二十八日松山の正宗寺で遺髪埋葬式のあつた時次のやうな手紙を見た。先生十三歳の時の手紙といふだけでも余等に取つては誠に珍しいが、其れが病氣もあらうにコレラ病といふのだから殊に珍らしい。総て平凡で無かつた先生は非常な病患に苦しめられ 叫喚のうちに亡くなられたのであるが幼児の病氣も亦平凡で無かつたのだ。此手紙は今度先生の訃音に接し安倍國手より大原氏に送られたものであるさうな。

日月匆、年已に暮れ明治十三年の春を迎へ余感ずる所あり謹で愚簡を草して安倍國手に呈す熟、客夏を顧みれば某月某日病に罹る乎實に困苦無疆其病たる之に罹れば生る者なく之に當れば死ぜざる者なし且に歩行するもの昏に黄泉の

客となり夕に健壯なる者朝に蓮臺の族となる然るに余九死
一生を免れ唯独り世に存するを得るは實に國手の治術宜し
を得妙薬の法に適するによるべし其傳染するも之を懼れず
暑烈しきも之を避けず國手の厚情之を謝せんと欲すれども
辭なく之を報せんと欲すれども能はず余今年十三年の元旦
に逢ふも實に國手の賜なり聊か濁酒一樽を呈し謝辭に易ふ
るのみ時嚴寒に逢ふ自愛せよ

明治十三年一月五日

常規拜

安倍國手机下

(子規追悼號「ホトトギス」六卷四号・明治35年
12月25日發行)

次に四國文學に載っている花叟の「子規の印象」を挙げ
る。これは虚子をはじめ何人かに四國文學編集者が依頼し
たものである。「神に等しいエライ人と思ふ」に花叟の子規
への真率な想いが滲み出ている。

2 子規の印象

松山 仙波花叟

私は先生をエライ人と思ふ。殆ど神に等しいエライ人と思
ふ。それは人格の偉大なる点と精力の旺盛なる点とに於
てである。

〔四國文學〕第一―五 明治42年9月15日

明治二十五年、文學講習會のお札に行つた時、子規から
「君らは今何を研究している」と尋ねられて花叟は和歌を
やっていると答えたところ、和歌は古臭い発句を大いにや
りなさいと話されたので、これをきつかけとして俳句を始
めたと述懐している。その三年後、俳句の旧派新派のけじ
めぐらひはつきかけていた頃須磨の療養所から帰松され
た時お目にかかつて直接指導を受けたいと思いつ、若輩の
上とてもそんな勇氣はなく、景仰の念に燃えつ、もお目にか
ゝる機会を逸してしまつたとあとになつて残念がついてい
る。

3 講習會の子規先生

仙波花叟

私には子規先生に就ての追憶談といふ様なものは、先生
に接近した事が無いので皆無といつても然るべきですが、
それでも餘り世間の知らぬ事が一つありますからそんな事
もあつたのかと子規先生の事歴の一端にと記して見ませう。
それは子規先生が御病氣の爲め大學を中途でよされて歸
松された折の事、當時文學愛好の中學生らの間で發行せら
れて居た「樸」同人(會名失念)が主催となつて、當時珍し
かつた夏季講習會の講師の一人として先生に御願して「文
學とは何ぞや」といふ風の講演を三日間程、風早和氣温泉

久米郡立の松山高小學校(今の市立の高等小學校の前身)で講演して頂いた事です。多分此橋渡しは碧梧桐君ではなかつたかと思ひますが、兎も角子規先生としては珍らしい事だつたと思ひます。

其時私の子規先生に就ての印象は、五分刈り頭のや、額の廣い長面テの白哲で普通人より少し背の高い方で靜かに物を言はれる蒲柳質に見受けられました。服装は白緋の浴衣に着袴、下に白フランネルのシャツ襦袢を盛夏にも拘らず着てゐられたのが不思議に思はれたが、やはり御病氣の爲であつた事を迺後に知つて成程と思ひました。

其時の御禮に幹事が行くと君らは今何を研究して居るかとお問ひになつたので、和歌をやつてゐると答へると、和歌は古臭い發句を大に御やりなさいと話されたので、これが動機となつて遂に私は俳句を始めました。

二十八年に先生が須磨の療養所から歸松された時に、自分も舊派新派のけじめ位はつきかけてゐた際なので、御目にかつて直接御指導を受け度いとは思はぬではなかつたが何分にも年も行かず世間見ずの田舎者としてそんな思ひ切つた事をする勇氣もなく景仰の念に燃えつゝ、遂に御目にかゝる機會を逸してしまひました。今に其當時を思ひ出すと誠に残念でなりません。

〔鶏頭子規号〕昭和8年9月1日

おわりに

花叟が笛鳴集第二の表紙裏に

三月一日正岡先生に刺を呈して添削を乞ふ

と自署している。

子規は根岸庵 褥中にて

病子規識

と、病の床にありながらも、病を全く感じさせない強さと元氣でもつて俳句の道に進む弟子に對して厳しくも温かい指導―教育的配慮をしている。そうした子規の意を花叟は「殆ど神」の意として受け留めたのであろう。

景浦氏が喜安氏と「帰省中の居士宅」を訪ねた時、子規はまだ寢床にあり「何か用かな」「少しお話を承りたいので参りました」と答えると、「さうかな。それならお上がりや。まだ食事はしてゐないが、それはかまはんからお上がり」といつて座敷に通され、「ヨシ僕の知つてゐるだけのことは話してあげる」と、「文学談を親切丁寧に」「非常に面白く又有益に」話してくれた。子規が若者に接するに際し、常に教育者的情熱で若者に対していたことが推測される。

子規と花叟の師弟關係は直接的には短期間であつたが、添削を通して、また子規からの花叟宛への手紙によつて濃密な師弟關係であつたことが分かる。

子規は熱血の教師であつた。

最後に紹介するのは、花叟が添削のお礼として郷里、腰折れ山に自生するエヒメアヤメ（小杜若）を贈ったことへの鳴雪、子規のあいさつ句である。

花叟兄腰折れ山の珍花を
恵まれたるに翁の堇の句

を思ひ出でて・・・

山路来て床しと見しはかきつばた

鳴雪

又昔男の詞をかりて

杜若はるばる給びし人をしぞ思ふ

同

本年も小杜若御恵贈被下

望外の喜雀躍の至に存奉

候乃到達愛玩罷在候

花に對して腰折れ山の我を耻づ

同

小杜若ありがたく候去

年のは鳴雪翁の方きは

ひよろしく今年のは小

生方への分よろしきと

の事に候

小包に小杜若のしほれたる

子規

(参考資料)

書名

著者(代表者)

出版社

1 俳誌『ほととぎす』

柳原極堂

ほととぎす社

2 四国文學

福田勝太郎

四国文学社

3 北條と鹿島

桧垣 悟

北条と鹿島発行所

4 俳誌『鶏頭 子規号』

柳原極堂

鶏頭出版社

5 正岡子規五十年祭記念

景浦 勉

子規五十年祭協賛会

6 句集 ゆみそ

有馬白陽

風早吟社

7 座談会「俳人仙波花叟を語る」

越智二良 他

愛媛新聞社

8 子規全集

和田茂樹

講談社

9 子規と周辺の人々

和田茂樹

愛媛文化双書

(平成二十八年三月例会講演 会員)

正岡子規と本田種竹

寫川武彦

一、はじめに

私は渡部勝己先生の著書「正岡子規の研究」の「子規の漢詩と本田種竹」を読んで次のことを知ったのである。

(1) 明治二十八年後半から二十九年にかけての二年が、子規の漢詩創作の面では最後の活動期であること。「漢詩稿」の登載詩数を見ると、明治二十六、七年は、それぞれ二首ずつであるが、二十八年には三十四首、二十九年には六十六首と急激に増加し、二十九年で終わっている。明治三十年以後には、七首ほどの漢詩が別の原稿用紙から発見されるにとどまっている。二十八、九年に消えかかっていた漢詩の焰が燃えあがったのは、その理由のひとつに、本田種竹がいた。と勝己先生はいう。勿論大きな理由としては、日清戦争従軍により中国本土を踏んだ子規。勃勃ぼつぼつと漢詩への創作欲を掻き立てられたことは、容易に推察できるのである。

(2) 「諸先生刪正詩稿」により、子規の漢詩に対して種竹が添削と批評を施していたこと。勝己先生の研究によると、「漢詩稿」において子規はまず自作を筆録しての

ち、自ら推敲した結果を墨書によって字句を改め、これを別紙に浄書して種竹に見せた。それに種竹が添削を施し、評語を加えて返してきた。それが今「諸先生刪正詩稿」明治二十八年の部の中に綴じこまれた十二首がそれである。種竹の添削を受けて、子規は「漢詩稿」の方に朱書を加えて定稿とした。このような順序が推定できるという。

加えて「漢詩稿」明治二十九年の部三首「金州城外」「木曾」「失題」にも、種竹に添削を受けたあとがあるという。

二、本田種竹の経歴

種竹の経歴等については、詩集「日本漢詩」解題（入谷仙介著）によると次の通りである。

本田種竹 文久二年（一八六二）～明治四十年（一九〇七）
阿波徳島の人。名は秀、字は実卿、通称幸之助、種竹と号す。藩儒岡本晤堂に学び、のち上洛、谷太湖、江馬天江、頼支峰に詩を学ぶ。明治十七年に上京して小官吏となり、駅通局、

東京府、農商務省、東京美術学校教授（歴史学）、文部省、内務省などを転々、三十七年に退官した。この間、三十二年に清国に遊んでいる。二十三年に森槐南、国分青厓、大江敬香と計って、青年詩人を糾合、星社せいしやを興して詩壇に新機運をもたらした。青厓が日清戦争に従軍したあと、日本新聞の漢詩欄の選者となり、正岡子規と親交を結んでいる。槐南、青厓と並んで明治後期の三大家と称され、また懐古の詩を好んで作ったので、懐古博士とも呼ばれた。梅花を酷愛し、明治二十九年、大和月瀬への観梅旅行は詩壇の盛事として、子規の「松蘿玉液」にも取上げられた。

「懐古田舎」は彼が自宅に与えた雅名であり、著書に「懐古田舎詩存」がある。（明治十一年十七歳）から没年の（明治四十年四十六歳）まで詩一千十六首を六冊に収録し、同時期の詩歴も巻六に付載されている。大正元年九月二十五日発行、著作者故本田幸之助、印刷者 日清印刷（株）である。

三、正岡子規と本田種竹

(1) 「子規の一生」和田克司編より二人の交友に係る事項を抜粋すると次の通りである。

明治29・5・23(木) ②本田種竹
29・8・7(金) 立秋。「種竹来る 秋の立つ朝や種竹

を庵の客」の句を詠む。

29・11・8(日) 愚庵十二勝（本田）種竹山人

「日本」——主な著作

29・12・26(土) 辞任の辞（本田種竹）

「日本」——主な著作

30・9・5(日) 雨、寒い。本田種竹が訪れる。

（病牀手記）

32・5月初旬 本田種竹令嬢、肺病を苦にして自殺。

（古）

32・9・15(金) 本田種竹が清国へ行くのを送る宴席が

羯南宅で開かれ、子規も出席。他に桂湖

村、国分青厓、静斎、丁軒が参会。（湖

村日記）

34・9・4(水) 午前本田種竹来る。①155

朝寒さに堪えられず湯婆たんぱを入れる。本

田種竹が訪れ、根津方角に転居したこ

と。美術学校改革の一件で職を辞した

ことなどを話す。①185

35・3・11(火) 三時、碧梧桐来る。腰背痛にわか

しく麻痺剤を呑む。本田種竹来て、た

だちに去る。①250

35・5・28(水) 「本田種竹長崎から詩を送ってくる」

①329

(2) 訪種竹君聴話詩而還

「漢詩稿」明治二十八年の部にある五言律詩である。読み下し文を掲げると以下の通りである。

種竹君を訪ひ詩を語るを聴いて還る

君を訪ふ古寺の北　山暗く雨蕭々

君を辞せば三更近く　天寒くして星清寥

竹籬に野犬吠え　林樹に怪泉響く

晤啾誰が氏の子ぞ　一燈細くして消えず

丁丁囲棋の客　暗窓に明光揺らぐ

細路幾屈曲ぞ　極まる処に枯木喬し

柴門吾が廬は是れぞ　小妹燭を点じて邀ふ

病心睡り得ず　思量長夜遙かなり

炬を擁して腮膝に平らかに　俳句芭蕉を点ず

明治二十八年当時子規は、上根岸町八十二番地に、種竹は上根岸町百十七番地に住まいしており、隣近所であつた。

「深夜の路を帰ってくる子規の胸中には、文学への心の高まりが鼓動していたであろう。睡り得なかつたのは病身からのみではあるまい。長い夜をさらに仕事にはげむのである」とは勝己先生の感想である。

この夜五歳年長の種竹との詩話において漢詩・漢文の造詣の深さに感銘を受けるとともに、再び漢詩への情熱を持ち始めたのである。種竹を訪ねたのはいつかに

ついて勝己先生は、前述の種竹に添削された十二首と同じ時期の作とのみ記している。又和田克司先生の「子規の一生」にも記されていない。そこで訪ねた日の特定をしたいと思います、先ず手掛りとして「懐古田舎詩歴」明治二十八年の項を繙いたのである。詩歴は時系列に記され、該当日前後次の通り。

1. 送鳥居素川之山東（鳥居素川の山東へ之くを送る）

2. 聞正岡臺南之山海関有此寄（正岡に台南の山海関を聞く。此に寄する有り）

3. 寄懷古島一念在臺灣（古島一念台湾に在りて懷を寄す）
注目すべきは、2の子規が種竹を訪ね台南の山海関について話したということである。なお（）書に読み下し文を追記した。

次に「子規の一生」から、子規の行動を追つたのである。

明治二十八年二月二十八日（木）日本新聞社で評議があり、従軍が決まり三月三日出立となる。社の向いの洋服屋に三月二日までの約束で背広上下、外套を注文する。（⑧354）

月末助骨を病院に訪う。従軍することになり、軍学の授業を受けに来たと言う。近衛師団の目標である山海関攻略法などを聴く。二十七年に助骨が書いた「松島紀行」を真赤に直して持つて行く。（佐藤助骨思い出す

まま)

助骨も種竹と同じく山海関のことを子規から聞いたのである。

月末軍学の授業を受けたとすれば、その日助骨を見舞い、その日の晩に種竹の門を叩いたのではないか。三月二日には古白が訪れ、従軍の荷造りを手伝っており、三月に入つては出立の準備のため、夜空を眺める余裕などなかったであろう。

(3) 「種竹山人」と「文壇一佳話」

「日本」紙上に連載された「松蘿玉液」明治二十九年四月二十七日の記事の項目である。子規が種竹を理解し、好意に満ちた文章となつてゐる。

「種竹山人」の中では、「余は大膽にも左の断定を下さん。曰く古来梅花を詠ずる者終に種竹の右に出づる者なしと。此點に於て青厓湖村も種竹に及ばざる遠し。」と記してはばからない。

「文壇一佳話」の中では、「余は青厓の富士日光に行き遼東に行きたると同じく是れ詩壇の佳話なりと思ふなり。中略、種竹の月瀬行は名義上の旅に止まりたるかと言ふに決して然らず。其月瀬より帰るや余に謂つて曰く、想像は何処迄も想像なり。終に實際に及ばず。月瀬に行きて余の利する処極めて多し、前年作る所の一半は之を改竄したり云々と」

明治二十九年三月種竹作「月瀬看梅十九首」の内より一首参看すると、

雲来たり乍ら雲去り 山送り又山迎ふ

潤道三十里 春風両日の程

林花皆面を識り 谷鳥名を呼ぶに似たり

直ちに茅屋を縛せんと欲し 石田(耕しがたき田地)

月明に鋤く

一、二句を句中対とし、対句ともなす。溪谷に沿つた三十里の道は春風を受けての二日の旅 林の中の花や谷に鳴く鳥も勝手知つたものとして迎えてくれる様だ。知人宅であろう茅ぶきの家に着かんとすれば、月明のなか石田を鋤いてゐるではないか。いかにも子規好み

(4) 時鳥蛙を捨てに出る夕

「寒山落木」巻五「時鳥」の項に「種竹山房」とした子規の句である。一読して種竹を訪ねての作ではないか、どう解すればよいのかとの疑念が生じた。「松蘿玉液」明治二十九年八月一日「蛙」を読んで氷解したのである。「蛙を好みて之を前栽(うえこみ)に養ふは大阪の露石子なり。知人に囑(たのむ)して蛙の句を作らしめ之を圭虫集と名づけて上梓せんとす。一のものずきなり。近頃種竹山人根岸の閑居に在りて時鳥を喜ぶ。庭前の小池蛙声かまびすしくために時鳥の声を妨

ぐるを憎み蛙を捕へて之を捨つ。亦一種のものずきなり。捨つる神あれば助くる神あり。種竹山人に捨てられたる蛙の露石子に捨はれなば如何に蛙の幸ならん。」とある。

(5) 秋の立つ朝や種竹を庵の客

明治二十九年八月七日(金)「種竹来る」として詠んだ子規の俳句である。「寒山落木」巻五「立秋」の項に所載されている。巻五には次の二句もある。

「秋時候雑」「種竹山人を送る」として「ひとへ物松島の秋に驚くな」「秋風」「種竹山人奥州へ下るに」として「歌は古し詩で白河の秋の風」種竹の来訪を受けて、二人の会話の様子がみえてくるようである。漢詩の添削のことは勿論、今後の旅行の話にまで及んだのであらう。

(6) 東京に三詩人あり、曰く国分青厓曰く本田種竹曰く森槐南是なり。明治二十九年九月五日「日本人」二十六号」に掲載された「文学」漢詩の項目に於ける前段の言葉である。この中で子規は三人を評論している。青厓の詩は雄渾にして格調高くも、椽大の筆(堂々たる文章)を揮はざるを惜しむとし、槐南の詩は青厓と相反し、俗題難題を特得に言ひ廻すは独歩と称すべしとする。種々の点に於て青厓・槐南の中間に位するのが種竹である。独り種竹の料理に入る者を雅趣とし、青厓

はこれを味はず、槐南も之を吸はずと評している。更に、種竹の作に「翠羽出竹飛」「蓮花池上開」等の句あり。我の目して雅趣と為す者実に此処に在り。と種竹を賞して評価している。「翠羽出竹飛」の出典を調べると、明治二十九年春の作「出_テ青梅_ヲ馭_リ途_ハ涉_リ玉川_ヲ遂_ニ達_ス芳野村_ニ」五首の中の五首目であった。芳野村に一泊し、早起して春水で嗽_ハぎつづ景を叙したもので、「翠羽(かわせみ)が竹やぶを飛び出した」とした一句である。

「蓮花池上開」の出典は不明だが「はすの花が池の上に開いている」である。種竹と好みを同じくする子規は、いずれも当たり前前に見えるが、雅趣のない者には、この状景に接することがむつかしいと云っているのである。

(7) 雨、寒シ俳句ヲ分類ス本田種竹来ル

明治三十年九月五日「病牀手記」に記している。和田克司著「子規の一生」のこの日にもこの記述のみである。

(8) 戲道種竹・不折諸氏黒田侯に俱して富士へ登ると聞えければ「竹乃里歌」明治三十一年見出し文であり、短歌八首がある。

その一を選ぶと「から歌に歌にもつくり繪にもかき我にあらはせそのくすしさを」がある。「くすし」とは、

不可思議である。神秘的である。あやしいなどの意である。これに應えるかの如く、種竹は沢山の詩を作っている。「登嶽二十一首」「雲海歌」「日出歌」「此日值陰曆六月念一實爲予誕辰」「芙蓉仙蝶歌」などがある。同年の「俳句稿」にも「送種竹山人上富士」として「十丈の蓮開くや筆の尖さき」があり、蓮の異名は芙蓉であり、芙蓉は富士山の異名である。

(9) 詩に名ある種竹山人支那に行くときも送る竹の里人明治三十二年「竹乃里歌」に登載された十首のうち最初の歌であり、種竹に頼まれ、喜んで贈ったものである。この十首は同年九月十四日の「日本」紙に掲載されたが、「子規の一生」によれば九月十五日羯南宅での種竹を清国に送る歓送の宴に子規も出席したとある。歩行困難の中、大好きな種竹のため「日本」を携え、特意の辯を弄する姿を想像するのである。

(10) 我家の長物

明治三十三年四月二日「日本付録週報」に載した隨筆の題目である。

「我家の長物ながものは皆人のたまものなり」に始まる。長物とは無用の物の意なり。この一節に「上海の醉蟹すいかいを種竹山人の贈られたる、其壺甚だ雅なりければ」として「から酒に蟹かに(醉)ひてありし澁色の低き小瓶に梅をいけたり」と詠んでいる。醉蟹とは酒に浸した蟹のこと

であり、それを入れた瓶に、雅趣を感じたのは二人共通であつたらう。

(11) 明治三十四年九月四日朝曇後晴昨夜ハヨク眠ル

「仰臥漫録」に子規が「午前種竹山人来ル」として、松魚(カツヲ)一尾の値段の話をしたと書いている。又、同年同月十八日の「仰臥漫録」にも「種竹山人来話、少シ話シタル故カ苦シクナル山人ハ根岸方角ニ轉居セリト美術学校改革ニツキ職ヲ辞シタル話アリ」と書いている。

(12) 種竹山人長崎より一封を寄せ来る。開き見れば詩あり。崎陽客次さきク。閱ス國民新報所載ヲ。虚子俳諧日記。叙ス子規子ノ近狀ヲ黯然あんぜん。久之しほくす。因テ賦ス一絶ヲ。遙ニ贈ル子規ニ。併セ似タリ虚子ニ。

松魚ノ時節醉ヒ湘靈シ。衆葉如レ煙ノ入レ眼ニ青シ。

不レ寐ネ思ヒ君ヲ過グ夜半ヲ。天邊何レ處ヲ子規ノ亭シ。

明治三十五年五月三十日、子規の書いた「病牀六尺」の一文である。一読して切なる気持が伝わってくる。四ヶ月余後子規は白玉楼へと旅立ったのである。

四、哭正岡子規十五首 節録

種竹に「哭正岡子規十五首」があり、その著「懷古田舎

詩存」に五首を節録している。作者注記を含め白文なので読み下す。

○注 君ハ以テ陰曆八月念日ヲ歿ス歳三十七與ニ謝惠連ニ同ニ其
齡ニ惠連ノ擣衣篇世ニ稱ニ傑作ト

天公才命妬雙全 天公は才命の双全たるを妬み

玉折蘭摧自古然 玉折蘭摧 古より然りとす

小樹逝時三十七 小樹の逝時三十七

風霜況又擣衣天 風霜況や又擣衣の天においておや

天公ニ万物造化の神 双全ニふたつながら全し。玉折蘭

摧ニ賢人などの死をいう。小樹ニ謝惠連。南朝宋。陽夏

の人。十歳にして能く文を属(つくる)し書画に巧。族

兄靈運これを嘉賞す。時人靈運を大謝、惠連を小謝と呼

んだ。謝は樹に通ず。

種竹は小樹を子規に擬し、その短い生涯に偉大な功業を

残したことを述べたのである。種竹は靈運、惠連の作風

を熟知すると共に生前の子規との交友の中で、話題にの

ぼったのであろう。

○注 蕪村ハ自ラ名ヲ其ノ所ニ居ル日ヲ夜半亭ト

三日不逢心晦冥 三日逢はざれば心晦冥

鏡中未免嘆塵形 鏡中未だ免れず塵の形を嘆ず

耳根髣髴清言在 耳根髣髴として清言在り

酒醒燈殘夜半亭 酒醒めて燈殘る夜半亭と

晦冥ニをぐらし 髣髴ニ思ひ浮かぶさま 清言ニ氣高

きことば

子規は「俳人蕪村」を明治三十年四月十三日より十一月二十九日まで十九回に亘り「日本」に掲載、「蕪村の文章流暢にして姿致あり。水の低きに就くが如く停滞する所無し。恨むらくは彼は一篇の文章だも純粹の美文として見るべき者を作らざりき。」と評した。又「蕪村句集講義」を明治三十一年十月より「ホトトギス」に連載、亡年十月に終了。更に蕪村忌を明治三十年十二月より始め五回催すなど蕪村の推奨に努めた。種竹もこれらのことを好意をもって理解していたのである。

○注 君ノ平生嗜ム本邦ノ謡曲ヲ

夜寒總帳颯靈颯 夜寒の總帳颯靈颯

月下幽魂不可招 月下の幽魂招く可からず

安得同君重把臂 安んぞ同君を得て重ねて臂を把り

玉梅亭院聽清謠 玉梅亭院清謠を聴かん

總帳ニ細布のとばり、後世靈帳をいう。颯靈颯ニ靈に向つ

て吹く一陣の風。幽魂ニ死者の魂 把臂ニ互に親しみあ

う義種竹は曾て玉梅亭において、子規の話を聴いたので

あろう。二人の雅趣に富んだ会話が聞こえてくるのであ

る。

○注 君ハ喜シテ摩詰集ヲ又別號竹ノ里人ナリ

聽鳥看花年又年 鳥を聴き花を看て年又年

秋池槐落夢如烟 秋池槐落ちて夢烟の如し

葯爐經卷浄名室 葯爐經卷浄名の室

心慕風流王輞川 心は慕う風流なる王輞川を

葯爐二葉を煎るいろり 經卷二聖人の著した書物 浄名

葯爐二葉を煎るいろり 經卷二聖人の著した書物 浄名

耶離城（維摩經の説かれた所）の長者。妙喜國から此處

に化生して釋迦の教化を輔けた。

王網川二王維のこと。字は摩詰（まきつ）という。維摩詰に因んでの

もの。また、晩年の官名により王右丞（おういうづ）とも呼ばれる。李

白や杜甫と同時の人として併称される。草隸及び詩画を

善くし、殊に山水雲石に長じ、南画の祖となる。別業を

輞川に営む。書室を辛夷塢（しんいこう）、竹里館（ちくりく）という。

其の詩は精微高澹（たんだん）。五七言古詩律絶に妙を得。

子規は明治三十年二月十一日から四月五日までに發表し

た「俳句と漢詩」の中で「漢詩の中毎句意全くして趣味

の備ふるは王維の詩なり。中略毎句趣味深遠なり。故に

毎回譯して俳句となすべし。」として、王維の詩句十九首

を挙げて俳句に訳している。数句示すと

「山月照（さんげつしょう）彈琴（だんきん）」琴を取つて彈すれば月山を出づ

「落日鳥辺下（らくにちとりべのした）」鳥一羽飛んで秋の日落ちにけり

「古木無人逕（こもく無人のちみち）」道細く人にも逢はず夏木立

新聞「日本」漢詩欄の選者である種竹も興味を持ってこ

のである。

○注 予（よ）遊（よ）清國（せいこく）時構園張り錢（せん）二三ノ知己（ちぎ）來り會（あ）ス君（きみ）ハ力疾（りきやく）

負戴（ふたい）ス而至（いた）リテ舉（あ）レ觴（さかづき）言（い）フ別（わか）レヲ予（よ）レ爲（な）シ潜然（せんぜん）

生別（せいべつ）毎（ごと）愁（うれ）爲（な）死別（しべつ） 生別（せいべつ）毎（ごと）に愁（うれ）いて死別（しべつ）と爲（な）し

被人（にひと）扶起（たすけ）餞閨門（せんきんもん） 人に扶起（たすけ）せられて閨門（きんもん）を餞（せん）る

傷心（しやうしん）第一（だいいち）西窓（さいそう）の雨（あめ）

夜燭（やじやく）松風（しょうふう）暗涙（あんなみだ）吞（の）む

扶起（たすけ）助（たすけ）け起（たすけ）こす。 閨門（きんもん）村里（むら）の入口（いりぐち）の門（かど） 暗涙（あんなみだ）人

知れぬなみだ

五、おわりに

子規と種竹の交友は新聞「日本」において、互いに文学

の紙面を与る者として始まった。推論を加えると、明治

二十八年二月二十八日、従軍への出立が三月三日と決まっ

た日に、子規は種竹を訪い、夜更けまで話し込み、種竹の

漢詩に対する造詣の深さに感銘を受けたのである。雅趣を

尊ぶことを同じくする先生を得て、漢詩創作意欲の高まり

を覚え、今後の添削についても依頼したのではないか。中

国を始め各地を転々、根岸への帰着は約七ヶ月後の十月

三十一日であった。「哭子規」詩に至るまで縷々述べてきた

が、二人の友情を伝え得たとすれば幸いである。

（平成二十八年五月例会講演 庶務部長）

大原其戎の句

『真砂の志良邊』より (続編)

森 慎 吾

〈本誌一五〇号に続く〉

第76号 明治19年4月12日

鍋一つかふらばぎせん緋の袴

波音も月もおぼろやみおつくし

潒標みおつくしくみお一水脈、潒(1.海・湖・川で、流れの作用で)

底がみぞ状に深くなつた部分。舟の水路になる。2.舟

の通つたあと。)の印に立てる杭。水路標

俳諧の連歌

飛なきにすがるおもひや時鳥まよひ鳥

月涼さに夜深ふに立

其 戎
兔 丈

礪山のおふるゝやうに汐満て

田よりも畑のだい新墾

餅をつく間は取おくむしろ機はた

宵のたくみの違ふ雪空

長公事も捌て見れば如才じやうさいなし

弄られ乍本々惠顔する

はつ鉄漿てつじやうを貰ひ合せしな、所 七所貰いく娘が始めて

鉄漿てつじやうをつける時七軒の家から鉄漿を少しづつ貰つて
来ること。

蛭子縮むしこぢのしけき浦うら

あなどりた鴉からすのこ糸も清静に

露をしたしむ朝起(き)の徳

月の友庭つくるにも友として

幸い□たなか汲もあり

待(ち)かねた風の便もひさしぶり

時間切ては眼の療池りやうちせず

二三人保養ほやうにならふ花のかげ

繫つなだ猿も春をよるこぶ

能きひになれば殊更霞かすみむふじ

畳の上のやうな海つら

漁師いさならも酒さけに洒しれて儀理知(ら)ず

縄なれし恋の解ぬいやしさ

はからずも結ぶの神を怨らん

樹木きは暑あつさに戦たたか共どもせず

夕立は門の掃除そうじをする時ときぶん

□□辺に羅

から荷を早う戻る駅馬

法螺の音の峯からみねへ続也

兜を脱ぬ武者のり、しさ

月の出る本とつ、波の發る風

茶席にわちとめかぬ茹菱

秋の来て早類髭の手にさはり

今めく人を見て吠る犬

むく起にきけば火事でない噂

駿河の方へ遥拝をする

したしみの有気な花に戻る雲

まだ寒暖をわけぬ如月

水垢にこゆる田螺の榮花かな

第78号 明治19年6月12日

斬に雲もたれて重し五月やみ

帆かけ添ふ青田のなみや淀堤

もの思ふしをりに更す蚊遣哉

「なじみ集」〜葉にふかす蚊遣かな

第79号 明治19年7月12日

かけ物の月日もてるや土用干

川骨のかがえく居るや水の月

河骨く沼や池に生える、すいれん科の多年生植物。根

茎は白く太く水底の泥の中に横たわり葉はサトイモの

葉に似る、夏、黄色の花を開く。

葛水にほしき氷室の花香かな

(略)

杖笠に古風をしのぶさい行忌

雨にやつれし人の哀さ

川とめの間に江の島へ廻(り)たし

川止く江戸時代、街道筋の大きな川で、増水のととき、通

行人が渡るのを禁じたこと。

捌(き)はせねと仕込しるもの

左まへなほる誓文はらひして

肌の雪にはふ似合な膳

聊(か)な義理もたのべぬ櫛もみし

偽とは知らぬあどけさ

すいとたつ杉は天守の御用木

北国ぶねの柱みじかき

年毎に亡者のをどる佐渡島

更行ほとる高き虫のね

こゝろみに哀の新葉切そめて

遠い處の□①□②ふ□③うを ①〜良の上に

一。②〜口偏に羅。③〜塩の異体字?

西京は奉公にんもとなく

花咲て流石世なみのたち直り

ふつかの灸も速にすみ

猶かうばしき春の夕榮

夕映え

其 戎 西行忌

教 良

(略)

さまざまな泪のつもるねはん像

米の相場のねむ気な頃

堂島へも雑魚荷を運ぶ小商人

今に叱を捨ぬたをやめ

指しめに力を得たる仕たち物

朝雨晴て空のうつくし

身構の心やすげな歩行わたり

芽(茅)の輪を潜濡手ふらく

甘酒はあまい言葉で進められ

飯時毎にもどる飼いぬ

一世界洗ふて出ばやけふの月

淡路風に須磨のやゝ寒

稲葉より青葉とやらか床(し)げに

鶏の鳴ともる主ら敷家

折角と来た飛脚荷の埒あかず

風は風(ぐ)ともたな引きし雲

木のちから有たけ見せし花盛り

尚齒會にはわけて賑ふ

第84号 明治19年12月12日

着袷や袖から通ふ夢のあや

袷(あは)八尺又は八尺五寸四方の掛布団。袖と襟がない。

さゝ啼きや早春の香を探るふり

其戎
隣舟

艸庵は年毎冬構へはせざれども浮世の塵を払ふてまめ

やかに遊(ぶ)ことは忘れざりける

年のなみ額によせぬ工夫かな

(略)

久保田隣舟居士の幽回忌に追善式俳諧一順を供す

幾とせもたかはぬ處へ月の旅

万国にまでも敬ふけふのはれ

第85号 明治20年1月12日

艸庵月なみ集句を撰こと数十年にいたり最早八十(や)の歳を

遍て真砂のかずをもしろらべ得がたく思ひはべれど人力あつ

きもとめに随ひ新玉の初明りをかりて巻中の甲乙をしるす

ことになりぬ

遠近の社中をつえよはつみ空

榮行く明りや清きかゞみもち

言葉したしき年禮の請

(略)

幸ひをかさねて高しはなの雲

鶴の巢組の行届ける

○

書初や躍てりしき海老の角

第86号 明治20年2月12日

さへづるや峯に粧ふあけの月

雪どけや長閑にけぶる浅間山

居士
其戎

其戎

同

其然

其戎

筆

舞ふ鶴やかすみの網を泄(もれ・もら)し影

河水を灯でせくやうな鶺鴒川

豊さのとゞく千万田や稲の波

し峯の雪うつすながめや清見淵

第88号 明治20年4月12日

藤の波

したしさや蛤窓にふじのなみ

姫島の裾ふみのばす汐干かな

薄墨桜に集会して

うす墨のはな香かほ請るやたび硯

第89号 明治20年5月12日

水に留守任せしにま鳩の浮巢かな

鳩かいかいつぶりの別名。かもに似た小さな水鳥。

ゆう月をわがもの顔や蚊喰鳥

蚊喰い鳥かむ蝙蝠

明治二十年四月一日一山居士追善脇發

居士

俳諧之連歌

卯の花に消か、りけり宵の月

円居ましてたれも敬ふ花のかげ

其 戎

円居ま一所に円く集まること。楽しく会合すること、団

樂。

ふ白居士追善脇發俳諧之連歌

穢けがたるものとはなし雪

寒さいとはず守居る塚

清浄なかたへと匂ふ法のはな

其 戎

居士

愛友

敬いこた蔭をあたゝかに敷

連甫

右伊予郡北河原村において執行

会主 洋岳、愛文

第90号 明治20年6月12日

藻の花も光たもつや玉の浦

うき草の花よりあはし水の泡

一聲に匂ひ有げやほとゝとぎす

八十じ近く老はへれど遠近の風音に随い日毎遊ことは忘れ

杖よりも日傘愛すやひと日旅

第91号 明治20年7月12日

水もやをおし分けき伐るや朝のはす

氣隨意さやたけのはしらにかむ簾

簾かむ竹の表皮や葦などを編んだむしろ。

茶と酒の酔をうばふや冷や汁

夕顔や氣易うのばすとも白髪

いたづらな己が誓ひか火取虫

共白髮

第92号 明治20年8月12日

この号より子規の句掲載。

題 霧 秋の蝶 艸の花

あさ霧や箸にもつる、舟旅はたご籠

夜を忍ぶ人の軒端や艸のはな

秋の蝶か頼(み)有り氣に來たりけり

「なじみ集」 秋のてふたのみありけに來りけり

席上兼題 虫 萩

虫の音を踏わけ行（く）や野の小道 松山 正岡

武蔵野や艸の波間に虫のこゑ 其 戎 「なじみ集」

席上題 鹿 稲

鹿聞て秋のまことをおぼえ鼻はな

第93号 明治20年9月12日

初汐やすゞめと馴染小はまぐり

「なじみ集」 雀となじむ

不二の峯こすが關路か渡り鳥

第94号 明治20年10月12日

炭の香を早したしむや後の月

吹かぜや松をなぶれど替ぬ色

第95号 明治20年11月12日

己が名に似ぬ茶の花の氣隨意哉

木の鳥のうき寝姿や夜半の霜

花之本祭協發俳諧之連歌 高吟（芭蕉）

はつ雪や幸いほにとまりある

（略）

空高う花かと幣もかほるらん

第96号 明治20年12月12日

弊社々々月なみ集の怠らざるは天然の明榮ならん□

天窓の月樂しむやすゝはいて 「なじみ集」 煤はいて □ 興に旁は欠

納会に酒宴をものし有志者懇々来陽初子の遊樂を約す

氣も永う持したくせん年の暮れ

年をふる尾も豊なる世なみ哉

第97号 明治21年1月12日

寒声や夜毎に磨く師のめぐみ

いめまでも正しう見ばや年男

蓬菜や粧ひふかきおほひろ間

（新年に三方まがたけに米・のしあわび・かちぐり等を載せ祝いものとする飾り）の略。

第98号 明治21年2月12日

月は客梅はあるじのすがた哉

春めけば日和も花と称されて

三津港夷子社捧燈拔萃旧十二月分上座十六章

灯台の波間に見ゆる千鳥の夜

第99号 明治21年3月12日

三津港夷子社奉燈廿一年舊正月分拔萃上座十章

もれ出るかすみの網や釣小舟

凧の尾にふり消され鼻朝の月

「なじみ集」 ぶりけされけり

ほがらかに空もぬるむや朧月

第100号 明治21年4月12日

ゆかしさや山吹の戸にたけ柱

蛤は凡人の及ざるゆめを見てたのしむ

はまぐりや波を静めし夢の文

三津港三穂社奉燈本月舊二月分拔萃上座十章

浮たかで見ゆや遥に汐干がた

○

兼て御披露申置候本社月次眞砂の志良へ第百号祝集大角力併余興とも開卷本月廿五日に相定め置候處句集の都合も有之候につき来る五月十三に日延いたし就ては和氣郡久万の台淨願寺（注、現・成願寺）に於て開卷いたし候間右同日午前第十一時までに御揃正午より角力取組吟声いたすべく四方の雅君御繰合を以御光来被下度奉待候右御案内相兼御通知まで頓首

（注）眞言宗、豊山派、満景山「成願寺」に本尊、虚空蔵菩薩。初代松山藩主加藤嘉明公は、この寺の本尊に帰依を厚くし、築城の際この寺を乾方面の守護佛と崇めて参詣、その折四方の景観を讚美して「満景山」の山号を賜った。あとと藩主松平（久松家）歴代の帰依を厚くした。伊予十二景（大正15年、南海新聞社主催）、愛媛八勝十二景（昭和25年、愛媛県、愛媛新聞社主催）、景勝の地。第101号 明治21年5月12日

題 入梅 酢 行々子

鮎の飯さます木陰のそよぎ哉

余興 角力句合題 杜若 汗

杜若見るや露けきたばこぼん

俳諧の連歌

木隠て有れども流石花あかり

眞砂の志良邊一百號祝集句合背春季十題

東西として撰吟二百章

左に追賀なすは己のみの栄花を欲（す）るにあらざるほも

雅友の榮久を懇望す 其 戎

壽きのなほ風雅也はるのかぜ

眞砂の志良邊一百號祝集開卷席上俳諧之連歌

弊社の永続は遠近の人力にあり 其 戎

風味よき人交はらんもの酒

千代よろづ句ひかさみし花曆 其 戎

○

明榮月なみ集一百号の祝しに猶龜の子泉かくち霍巢日記の永続にあやからんと雅友とともに熊の台（注・久万ノ台）へまかり東は石鎚山の峯より昇る旭をいただき 谷々よりは妻乞ふ雉子の声たちてほがらかさの余り梅が香にのつと日の出る山じかなてふ高吟をいとど感じひめもす山院に遊酒酣あそびに至り西海の眺る長門豊前豊後姫島の裾長濱等の美景眞砂の数々ふと見え侍れど砂書のいとまあらず しかはあれど小不二山のゆふばえにほだされはからず序筆を染る故に眞砂の志良邊のはし書に加ふ

日永さやいつ迄愛に伊豫乃富士

「なじみ集」にいつまでこゝにいよの富士

「なじみ集」にいつまでこゝにいよの富士

第102号 明治21年6月12日

題 葉柳 茅の輪 団扇

連理なす松陰むすぶちの輪哉

「なじみ集」く結む茅の輪哉

余興句合 題 風薫 水鶏

鵝の濡羽こぐや岩間のか是薫

「なじみ集」く鵝のぬれ羽こぐや岩間の風薫

席上題 虎が雨 蟬

衣脱こえたる蟬のすがた哉

第103号 明治21年7月12日

氣隨意さの見ゆる昼寝の仕ぶり哉

人形かく子は天窓書てふよき戒にあり侍れど教導の一端に

は画そらごとにも鬼に墨染衣を着せ角を落させんことを是

とす

子の智慧を磨く硯を洗ふたび

席上俳諧の連歌

つき澄(み)てか是もくゞらす狐蹄

俳諧之連歌

もの思ふ葉に更す蚊遣りかな

涼しさくばる風鈴の音

川岸傳ひうけ行(く)舟のかすくに

茶は飲(ま)ずとも釣は好(き)也

隙にして居ても世話しき月の秋

明暮誰を招く穂すゝき

此あたり妻乞ふ鹿の通ひみち

鎌は研ともきれぬ恋巾

文からを守(り)のやうに肌につけ

勸化の世話の行き届ける

名にも似ず目黒は青き敷たたま

あやの分らぬ禁制の札

月影を水にもらさず(す?)をし番ひ

蕎麦湯を吞一仕事する

相應した疝氣の灸を誉(め)そやし

幸得たかおたちいの沙汰

花の香をむすぶ西山此がし山

わたくしのなき春の曙

第104号 明治21年8月12日

老弱ながら樹下石上の掙は忘れがたし

こと足るや芭蕉一葉を庵の空

朝顔や残暑追ゆくつるののび

かは流れ有も風情や遠はなび

はからずも余所の時計に眼を覚まし

第105号 明治21年9月12日

秋の蚊の果しら波や夕あらし

雁の羽にたゝみて下す冷み哉

洲

洲

洲

洲

洲

洲

洲

鴛鴦

戎

洲

戎

洲

「なじみ集」

風流れ

月すゞしくとつかふ嘉定せに

きよらかに祠ほくらのかきや白木檜

「なじみ集」

熊本県肥後国細川梅露靈神招魂祭九月十三日弊社において

執行

脇發俳諧の連歌

靈神

しらす火やわかる、頃を啼く鴉

速にみたまやはらぐ花あかり

和らぐ

文武両道に明かなる梅露君御遠行あらせられしを神保して

露清く文武をてらすまつり哉

第106号 明治21年10月12日

松のこと粧ひそめてふゆ隣

白菊やわたくしのなき露明り

花盛しめねばならぬしらみ紐

菊酒やてふの折形したはしき

漲なみ(り)し瀬音にそよぐす、きかな

八重くもり花の都と称すらん

ふるめかしくあり侍れど累紙あるに任せ弊老画像のそで書

をこのはしにかへ侍る文久二戌とし二條殿へめされ宗匠御

免許ありしにつきては烏沙巾御装束白扇等を拝戴し御前に

おいて花の御會をつとめ拝事御用係り諸太夫村田左衛門殿

岡本織部殿野間参河介殿御列席のありがたさに

峯のはなぬかづくたびにかほり覺おぼてふ一句を奉その後とし

ごと春秋二度づ、上京し御殿へ伺ひその他随意に遊びし幸

ななめならず

月花と艸紙を友に千代よろず

其 戎

第107号 明治21年11月12日

御拳のつるはれ、したか野原

こたびの關取は東西ともに上手を尽くし左をさせば右へか

はし右をさせば左へかはし稲妻のごとくはたらきはべりて

暫し勝負決しがたくゆへに蕉翁へ預け置不日勝負さすべし

不日ふじつ日ならず、近いうちに

もつれ鼻時雨の脚にさす日脚

花之本本祭脇發俳諧の連歌

祖神(芭蕉)

おもしろし雪にもならん冬の雨

取わけてそらに文なす花明り

奉吟

明榮の花香いやますまつり哉

冬ながら月花したふ今宵かな

第108号 明治21年12月12日

いほ清しゆきに馴染だたけ柱

梅探り得た気ゆるみや大おほ三十日

古びても月日は清きこよみ哉

第109号 明治22年1月12日

大箸の木香もゆかしや吉野椀

二見路やなほも粧まふ初あかり

庵清し

万物はみな花としてはつみ空

「なじみ集」 皆花として初み空

ゆたかに新年を迎しこゝろばえにいまだちひさき

ものは眼にふれず

相撲取は羽織や不盡は雪を着て

○

しわ手にふでのゆきとゞかざれば十より七ツのかな書に諸

君子の信情を謝す

年禮の花といたゞく名札かな

明治廿二年一月

第110号 明治22年2月12日

驚やうき名もきよきながら川

きた者はゆるさぬ花の長廊下

しらう米に心てり添ふ会議哉

社中風力を争ふも 隆盛の一端なるべし

色も香も競ひ合けり座ろん梅

老師を祝す

御手に富士のせた如や年の豆

第111号 明治22年3月12日

葉も花もかすめと匂ふ木艸哉

花の夢うばふすがたや蝶二つ

十とくにわびた行司や花の陰

十徳 室町・江戸時代の衣服の一種。素襖すぢに似てわき

をぬいつけた羽織のようなもの（素襖 麻地で、定紋じようもん

をつけた衣服。ひたたれ。初め庶民の常服だったが、

武士の常服となり、江戸時代には武士の礼服となった。

其戎宗匠は普段十徳姿であった。）

清らかやこと須先の白すみれ

あいひきのしほや左右に小蛤

第112号 明治22年4月12日 三月三十一日其戎宗匠逝去

明榮社月次拔萃

嘯月齋連甫撰

題 花 筑广祭 孕鹿

鳥啼やひやみをさそふ花の奥 東京 丈 鬼 子規

追 加 連 甫

弊社の継続を謝す

永かれと祈るちきりや鍋祭り

我師四時園翁のみまかり給ひしより晝夜恩をわすれず

連 甫

花見てもわか力とハ思はれす

其 然

父其戎艸庵前庭にあるひともの花の荅を樂しみに不図

客月（注、先月）三十一日午後十二時彼の花の満開なるを

詠めて一句を残しかへらぬ旅におもむきいとかなしさのあ

まりに居合の風子と涙をのこひ左の連歌をもよほす

（注）其戎の菩提寺「願成寺」（松山市住吉二丁目一）の

過去帳には、四月一日とある。

寢姿の司やはなをまくらもと

「なじみ集」花を

居士

肖小生社員之協議に依て社主後任相成り候間不相変御引立
被成下度此段奉願候也
四時園其然拜

霜のわかれに窓寒き月

其然

第113号 明治22年5月12日

川傳ひ舟にもらす蝶のきて

連甫

明榮社月次拔萃

飛脚ハいつも世話しさう也

守雄

四時園其然撰（以下同じ）

氷もち器を見てもきよらかに

吟雪

題 時鳥 扇 若葉

空に涼しう居るしら雲

教良

亡師其戎翁の大練忌靈前を拝す
葉櫻やはな見た日より七七日

下略

四時園其戎居士靈手向

うけたまへ我も手向ん春の水

本社全主四時園其戎翁病氣の所養生不相叶三月三十一日死

去致候に付社員協議之上後任左之通決議候條此段御通知申

上候尚引続き御出詠被成下度奉願候也

社主四時園其戎

四時園 其然

追加

其然

晝かほやす磨も明石も同じ色

昼顔や須磨も。

〔参考資料〕

前号に掲載済み

明治二十二年四月廿日

明榮社幹事拜（注・連甫）

（平成二十七年二月例会講演

本会経理部長）

其戎病氣之所養生不相叶客月三十一日午後十二時違世致候
生前は諸君之御仁愛を以数十年御風交に預り且明榮社月次
集へ御投吟被成下既に昨廿一年四月を以て百号之祝集に及
亡父に於も後世迄の面目□に難有奉拜謝候就ては今般乍不

検証！ 愚陀佛庵所有者の変遷と子規漱石遺跡保存について

二一神 將

1 はじめに

愚陀佛庵再建については、平成二十二年から県と松山市が連絡会を作り五回にわたって検討した結果、現時点では適地がなく当面再建を見合わせざるを得ないということになった。しかし、来年が子規漱石生誕百五十年記念ということで全国的にも注目されていますし、また全国の漱石関連一〇文化団体から松山市長に愚陀佛庵再建の要望書も出され、「まちづくり」の観点から再検討すべきとの声もあります。

文化財の再建については最近、松山市でも宝巖寺再建の事例があります。宝巖寺も立派な子規漱石遺跡です。子規と漱石は明治二十八年十月六日に開通したばかりの道後鉄道に乗って道後湯之町を訪れ道後温泉に入浴した後、湯之町を散策し宝巖寺に参詣した。二人の文豪の卵は山門前石段に腰かけて何を話合ったのか気になる処です。『色里や十歩はなれて秋の風 子規』

宝巖寺の本堂が失火で全焼して、もう直ぐ三年になります。本堂が全焼した時、誰もがその再建を危惧していた。有

名な寺ではあるが檀家が少なかった。再建には少なく見積もっても一億円は越すという話でした。その上、長岡住職の死という最悪の事態が起こった。住職が何かやってくれんと思っていた檀家の人たちや地元商店街は、この事態に一致団結した。本山もほって置けなくなって、皆んなの努力によって広く全国的に募金活動が行われることになった。マスコミが大々的に報道したこともあり募金額も増え、当初の目標一億円に到達、工事費を一億五千万と決め、募金額が一億二千万円に達したので工事中工。その後も、個人の他に銀行や企業からの寄付で二億三千万円が集まったといわれている。その結果、当初計画には無かった一遍上人堂や青銅の一遍上人立像も作られ、五月十四日、盛大に落慶式が挙行された。今では、ボランティアガイドの方々の協力もあって全国から訪れる観光客の応対も出来るようになった。前置きが長くなったが、今回お話しする愚陀佛庵再建のモデルケースにもなる宝巖寺再建の事例を紹介した。

2 愚陀佛庵誕生と所有者の変遷

【資料1】を見てください。女流俳人として知られる久保より江の祖父上野義方が明治二十一〜二年頃（より江氏の記憶）、隠居所として母家裏に二階建ての離れを新築したが、明治二十八年七月に夏目金之助（漱石）が松山城麓にあつた下宿愛松亭あひまつていから転居し、八月二十七日から病み上がりあがりの正岡子規と五十二日間の同居生活をおくつた。漱石はこの離れを俳号に因んで愚陀佛庵と名付けた。この愚陀佛庵は、昭和二十年七月二十六日、米軍機の空爆により焼失したが、子規漱石の二大文豪の遺跡として記念すべきものとなつた。

【資料2】の旧土地台帳を見てください。愚陀佛庵は、明治二十九年四月、漱石が熊本五高教授に就任のため松山を去つた後、明治31年に上野義方が亡くなり、翌年、松山の資産家森英三郎に母家と一緒に売買され、更に翌年、松山市近郊川上村北方の元庄屋渡部満弘が購入、五年間所有していたが明治三十八年に松山市湊町三丁目の佐伯祐三郎が買い取つた。佐伯氏は一年も経たない明治三十九年五月に北条町（現松山市正岡神田）の元庄屋寺井善政に転売した。このように愚陀佛庵のあつた場所は、松山市の中心部二番町にあり、松山市第一の商店街大街道に近く、不動産価値も高く、また大変便利な場所にあつたので、松山市近郊の資産家が購入することが多かつたようだ。

3 改築された愚陀佛庵

子規漱石が同居していた愚陀佛庵は、二人が去つた後、住む人たちによって変更が加えられた。

①原点1 久保より江の見た愚陀佛庵と母家の光景

子規がいた頃、母家に住んでいた上野義方の孫娘宮本より江（後の俳人久保より江）は、当時11歳、母家との関係について「両先生（子規・漱石）や多くの俳人は皆この母家の格子戸を入りされたので、暗い土間、井戸端の御影石を踏んで小庭に出て、目隠しの垣根をくぐつて離れ（愚陀佛庵）の沓脱に到着……この格子戸から奥への通路以外、母家は先生方には無関係である」と述べ、後に訪問した著名人が書いている愚陀佛庵への門や狭い通路は無かつた。

②原点2 温泉郡川上村の素封家渡部満弘（松山子規会幹事渡部満泰祖父）が購入した愚陀佛庵の概要

明治33年12月に購入した母家と離れの「土地建物売渡証」に添付の愚陀佛庵概要によると「部屋二階六畳外に脇地袋付、同次三畳半押入付、上り段同下ノ間六畳に床に地袋付まわり縁、次四畳半に押入付 同様雪院の通り板間有り座敷への通り縁有り」と記され、見取り図は階下部分だけが、階下には北に六畳間、南に四畳半があり、四畳半の東側に階段、その東に押入が設けられている。部屋むらの北側、西側に縁があり、南側には本家（母家）と雪院（便所）をつ

なく廊下が伸びている。」と当時の愚陀佛庵の様子を記録している。

③風早郡正岡村神田元庄屋寺井家が変更した愚陀佛庵の箇所

寺井善政は大正二年二月に共有者から持ち分を買い取り旧上野邸の所有地全部（40坪余）を取得した。その後、井戸端、台所を増築し土塀が出来たので愚陀佛庵に門、便所、格子戸を造り母家と分離した。これにより寺井家の関係者が別々に住むようになった。松山の女学校などに通学する者や便利なので松山に出て来る者もいた。しかし、昭和二十一年七月二十六日の米軍機の空爆により松山市街地は焼け野原となり、母家も愚陀佛庵も焼失した。寺井家では、財産整理として、これらの土地を相続していた長男寺井太郎によつて昭和二十三年に処分された。実に四十六年間、母家と愚陀佛庵を所有し続けた。

4 極堂、子規漱石の遺蹟保存を提唱する

愚陀佛庵の遺蹟保存について、最初に注目したのは、自身、愚陀佛庵に毎日のように通い子規から日参組と比喩された柳原正之（極堂）であった。極堂は政党間の政争に厭気が差して、昭和二年伊予日日新聞を廃刊し、二度目の上京をした。俳壇に復帰して最初に感じた事は、親友であり、俳句の師匠でもあった子規が世間から忘れ去られようとし

ている現実だった。子規が亡くなって、既に25年が経っていた。極堂は危機感をもつて子規顕彰と子規遺蹟保存に取り組むことになった。

昭和八年、正宗寺が失火（放火の説もあり）のために子規宅の廢材で建てた子規堂も類焼した。同年三月、極堂は主宰する俳誌『鶏頭（2-3）』に「子規漱石の遺蹟保存に就ての提唱」を発表した。そこではかつて子規漱石が同居した二番町の家屋をこの際思い切つて買収し俳句の殿堂を作つてはどうであろうというものであった。6月、極堂は『鶏頭』に掲載中の「子規と其郷里松山」の取材のため帰郷し、村上露月らと松山商工会議所に集まり、第一回の保存協議会を開催した。そこで決まった事は二番町の二文豪同居の屋敷（約一五〇坪）を買収し保存する、両文豪の遺物・文献保存倉庫を増築する、句碑を市内各地に建立する、子規堂を正宗寺内に再建する、財団法人として運営する等の具体的なものであった。昭和十年、正式に子規漱石遺蹟保存会が結成され活動を開始した。

保存会による募金は全国的に行われたが予想に反して募金は集まらず、その上、人を通じて買収を内諾していた寺井氏にも断られ、結局、子規堂再建のみが実施された。当時、母家には寺井太郎氏の家族が住んで居り、愚陀佛庵にも親戚の河野いくよさんが住んでいて句会など開いていた。しかし、どちらにしても全ての計画は戦争によつて水泡に

帰してしまつた。

5 愚陀佛庵の再建について

①戦後の、愚陀佛庵跡地の所有者の変動

戦災によつて子規堂も愚陀佛庵も焼失してしまつたが、子規堂は翌年、一人の市民の寄付金により再建された。極堂も記憶を頼りに松山市湊町四丁目一番地にあつた子規宅の再現に協力した。しかし、愚陀佛庵の再建は難しかった。

この時、一番の痛手は、最大の理解者であつた村上霽月が昭和二十一年二月十五日に亡くなつた事だつた。俳人として旧派からも尊敬されていた霽月は産業組合中央会理事として中央で活躍し、日本経済発展のため銀行合併に協賛し、自ら頭取であつた愛媛銀行（現愛媛銀行とは別）と芸備銀行との合併を決断した。しかし、その後、日本は大不況（昭和恐慌）となり、合併契約履行の責任をとつて一切の私財を投げ出した。経済界を引退後も人望があり各界に影響力のあつた霽月が居なくなつたのは極堂にとつて大打撃であつた。

その後、愚陀佛庵の再建問題は暫くは鳴りを潜めていたが、北条市の寺井家が松山市から撤退し、愚陀佛庵跡地を売却した事から愚陀佛庵再建問題が再熱することになつた。昭和二十三年一月六日、当主寺井太郎は、旧上野邸跡地二番町二番二（一四〇坪五合）から半分の土地二番五（70坪

25）を分筆した。最初にこの二番五の土地を買つたのは松山市道後の江濱善吉であつたが、一ヶ月後には伊豫郡原町村の西岡義長・愛夫婦に売却、更に昭和三十一年五月二日に隣（二番町三番地の元大嶋嘉泰、俳号梅屋が住んで居た）で料理屋「天平」を営業していた竹内三平が買取つた。

また、分筆元の二番町二番二（七〇坪二五）は、昭和二十三年十一月七日（松山法務局受付は昭和二十七年七月二十三日）に遡つて松山市若宮町の重見了平・辰馬親子が所有権登記し、昭和三十二年八月二十九日に了平氏が枡葺き（そぎふき、薄くそいだ杉板を使う屋根の葺き方）と鉄板で葺いた平家を建て、おでん屋を開業した。

なお、昭和二十六年九月十九日に子規没後五十年祭が松山市で盛大に開催され、虚子はじめ草田男などの錚々たる俳人が松山市に参集した。この時、子規五十年祭協賛会が「夏目漱石仮寓愚陀佛庵址」石碑を旧上野邸跡道路端に建立した。

②極堂、愚陀佛庵再建に命を賭ける。

極堂は昭和八年、子規漱石の遺蹟保存と顕彰のため愚陀佛庵の買い取りを提唱したものの寄付が集まらず失敗、以来二十三年間、九十歳となつた今、子規顕彰の最期の仕事として愚陀佛庵再建を決意した。そして昭和三十一年十月の子規会例会で所信を述べ、友人知人に協力を要請した。更に翌月の例会では、持論である運営は個人でなく、県市が直接

運営するか財団を作つて行ふべきであると語つた。ところが隣接地で料理屋「天平」を営業していた竹内三平氏が旧上野邸の半分（七〇坪二五）を購入し、其処へ愚陀佛庵を再建したいと子規会に申し入れて来た。景浦稚桃会長は幹事と協議し、再建後、営業には使用せず句会、歌会、遺墨展などに優先使用することを条件にして再建を了承、例会で表決することになった。これを知つた極堂は「竹内氏の人格を疑うものではないが、愚陀佛庵は貴重な遺蹟であり個人が管理するのではなく、県民の総意によつて再建し、出来れば県市が直接、または財団を作り管理運営するのが望ましい」と持論を主張して反対した。そしてもしどうしても愚陀佛庵のあつた場所が買えないのであれば、次善の策として場所にこだわらず、公的な道後公園か城山麓の郷土芸術館周辺が望ましいと所信を述べ、子規会幹事会と対立した。

これに驚いた県議山上次郎氏は、戒田副知事と相談し県庁副知事室に急遽、関係者を召集し意見調整会を開いた。極堂はかねてからの持論「子規漱石遺蹟・愚陀佛庵の文学史上における重要性について」熱っぽく語り、参集者の感動をよんだ。その結果、県と松山市が中心になつて遺蹟地の譲渡交渉にあたることになった。

このような状況下、12月26日商取引に詳しく極堂と親交のあつたヤママン社長で郷土史家の山本富次郎氏が、「愚陀

佛庵」の商号を登記し、この名前を使つて松山市内で料理飲食業が出来なくするよう手を打つた。しかし、翌年行われた県と竹内氏との交渉は決裂し、竹内氏は2月、本店の改築と共に本店離れ座敷として建坪11坪、二階建ての愚陀佛庵の建築申請書を松山市に提出し、建築に取り掛かつた。極堂は、年末の副知事室の対応で疲れたのか新年早々に風邪をこじらせ、そのまま床について、二度と起き上がれなくなつた。松山市は、極堂の子規顕彰の功績を認め名譽市民第一号として表彰、県でも極堂の活動を支援するため極堂会を作ると共に初の県民賞を贈つた。極堂は十月七日惜しまれながらその生涯を終えた、辞世句『吾が生はへちまの蔓の行き処』享年九十一。正に命を賭けた極堂の愚陀佛庵再建の取り組みだつた。

③再建された愚陀佛庵のその後

旧上野邸（一四〇坪五〇）は、戦後寺井太郎によつて宅地の半分が分筆され昭和二十七年七月二十三日に元の二番町二番地第二（七〇坪二五）を重見了平・辰馬親子が購入、分筆された二番町二番地第五（七〇坪二五）は竹内三平が昭和三十一年五月二日に購入した。重見氏は、この場所に枌葺き（そぎふき）薄い杉板を重ねる屋根の葺き方」と鉄板葺きの平家を建ておでん屋を開業した。一方、竹内氏は昭和二十四年に隣接の二番町三番（旧大嶋梅屋所有地）を購入し、料理屋「天平」を開業していたが、新しく購入した

土地に昭和三十二年七月一日に木造瓦葺き二階建を増築した。これが問題の再建愚陀佛庵である。

松山市は、戦災により市街地が焼け野原と化し、土地区画整理事業を実施していたが昭和三十九年六月十日完了した。この事業により、中心市街地は所有地が大幅に変更され様相を一変した。愚陀佛庵周辺も道路拡張などにより、旧土地区画も変更され正方形、長方形に修正され面積も旧上野邸では140坪50から53坪37区画が二区画に約二割五分程度減少した。従って、周辺の道路拡張の關係で元の土地と区画整理後の土地とは場所が変わっており、旧上野邸を半分に分割した重見氏と竹内氏から購入した浜商の土地はどちらに愚陀佛庵があったか区分けは難しい。

実は私も「天平」には何度か行ったが、昭和50年頃、東京の友人を招待した時、本店の部屋が満員で、女将に「離れに行きませんか」と誘われ、廊下を渡って離れで一杯やったことがあった。建物は薄暗くて人の気配もなく、店の女将も一言も此処が再建した「愚陀佛庵」とは言わなかった。「一番町の家」に書かれている愚陀佛庵とは全く雰囲気も違い、庭も路地もなく道路から直ぐにある建物が再建された愚陀佛庵とは思わなかった。矢張り、山本富次郎氏の商号登録が守られていたのだろう。

極堂さんが命懸けで願った子規顕彰の目的は、昭和56年当時、全国でも珍しかった個人名の付いた松山市立子規記

念博物館として結実し、ここに俳句の殿堂が誕生したのであった。

一方、竹内氏が再建した二階建ての建物は、元愚陀佛庵とは佇まいも場所の位置が違う上に建物自体専門的検証もない事や近くの萬翠荘裏手に県によって再建された愚陀佛庵に負けて誰も訪れない無用の長物となってしまった。

6 おわりに当たって

いろいろと話してきましたが、城山山麓に県が再建した愚陀佛庵が風水害で倒壊し、その後の文化庁の松山公園一帯の重視などもあり、再々建は難しくなったように思う。矢張り文化財の遺跡保存は移築は別として場所が重要とされています。東京の子規庵も以前は誰からも注目されず、ただ建物があるだけでしたが、今では台東区の重要文化財として、また住んで居た本郷のある文京区でも文化活動の拠点となっています。今、これらの活動を見て羨ましく思うのは私だけでしょうか。文化財保護の観点から云えば、それがあった場所、本物こそ重要なのです。これからは松山市の文化度が試されます。市民もこれを心して取り組んでゆくべきと思います。目先のことより百年先を見据えた対応こそが肝要です。ご静聴ありがとうございました。

(平成二十八年六月例会講演 評議員)

【資料1】 愚陀佛庵再建経緯

明治21年頃 上野義方、宅地(40坪5合)と母家購入。
 明治21、22年 上野義方、敷地内に二階建の隠居所新築。
 明治28年7 漱石、上野義方の二階建離れ(愚陀佛庵)入居。
 同 8・27 子規漱石、愚陀佛庵で52日間の同居。生活始まる。
 明治29年4・11 漱石、熊本五高へ赴任のため愚陀佛庵出立。
 明治32年12・25 森英三郎、旧上野義方宅地・建物購入。
 明治33年12・4 川内村旧庄屋渡部満弘、森氏より宅地購入。
 明治36年9・30 渡部満弘、佐伯祐三郎(湊町三丁目)に売却。
 明治39年5・15 旧上野邸を寺井善政(正岡村神田)買収。
 大正13年8・17 寺井太郎、父善政の死去により相続。
 昭和8年2・6 正宗寺失火(放火の説もあり)、子規堂類焼。
 同 3・19 俳誌「鶏頭」で子規漱石の遺蹟保存を提唱。
 同 6・17 俳誌「鶏頭」で遺蹟保存の具体化を提言。
 同 7・1 俳誌「鶏頭」で遺蹟保存の具体化を提言。
 同 8・ 募金に失敗、子規堂再建のみ行う。
 昭和10年5・ 子規漱石同居遺跡保存会生る。
 昭和18年1・19 村上齋月の支援を得て松山子規会結成。
 昭和20年7・26 連合軍の空爆により、子規堂、愚陀佛庵焼失。
 昭和23年1・6 寺井太郎、旧上野邸を分筆、買いやすくする。
 同 1・23 松山市道後江濱善吉、寺井太郎より旧上野邸
 (二番町二番第五70坪25)購入。
 以後、西岡義長・愛夫妻を経て黒川愛氏へ転売さ
 れる。
 重見了平・辰馬親子、寺井太郎より旧上野邸跡
 (二番町二番第一70坪25)購入。
 なお、松山法務局受付(昭和27・7・23)遡及登
 記されている。
 昭和24年9・28 竹内三平、隣地(元大嶋梅屋宅)で
 料理屋「天平」開業。

昭和26年9・ 子規五十年祭協賛会「夏目漱石仮寓愚陀佛庵址」
 石碑を建立。

昭和31年4・30 竹内三平、松山市千舟町黒川愛より旧上野邸跡
 (二番町二番第五70坪25)購入。
 同 10・19 極堂、子規会例会で「愚陀佛庵再建」を語る。
 同 12・18 山上県議幹旋、県副知事室で意見調整会開催。
 同 12・26 山本富次郎、愚陀佛庵の商号登録。
 昭和32年2・ 竹内氏、建築申請を松山市に提出。
 同 2・ 極堂、風邪をこじらせ病臥するようになる。
 同 2・22 極堂、子規会退会を表明する。
 同 3末 県、竹内氏と土地譲渡交渉拒否。
 同 7・1 極堂に第一回名誉市民の称号贈与。
 同 10・4 愛媛県は極堂に初の県民賞を贈る。
 同 10・7 極堂永眠する。享年91。
 昭和39年6・10 土地区画整理事業完了。所有地減少。
 昭和56年4・2 子規記念博物館開館、愚陀佛庵一階復元展示。
 昭和57年8・ 県、愚陀佛庵を萬翠荘裏高台に復元。
 平成15年12・ 浜商、竹内氏から土地購入、100円駐車場運営。
 平成22年7・12 重見氏も現在、月極駐車場を運営。
 同 9・ 集中豪雨のため復元愚陀佛庵倒壊。
 同 9・30 県市、担当課長級による連絡会発足。
 同 10・12 愚陀佛庵を本来の場所に復元する会要望。
 平成23年2・8 道後温泉誇れるまちづくり推進協議会、宝厳寺前
 要望。
 平成24年2・16 第3回連絡会議、愚陀佛庵跡は購入費高額の除外。
 平成25年3・19 第4回連絡会、萬翠荘裏山の安全対策の結果待ち。
 平成27年11・6 第5回連絡会、「適地なく、再建を見合わせる」
 県内外の漱石文化十団体、松山市市長へ再建要望書。
 (二神 將作成)

【資料2】

土地番帳	字 二番町		地番 二番上四ノ二		三番 上四ノ二	
	地目	面積	内 容	所有主	所 在 所	主 氏 名
1	雑種地	1,000.00	昭和十一年六月五日 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	上野 義方 森 重吉 浪部 武弘
2	雑種地	1,000.00	昭和十一年六月五日 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	上野 義方 森 重吉 浪部 武弘
3	雑種地	1,000.00	昭和十一年六月五日 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	上野 義方 森 重吉 浪部 武弘
4	雑種地	1,000.00	昭和十一年六月五日 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二 松山市二番町二番上四ノ二	上野 義方 森 重吉 浪部 武弘

松山市二番町

【資料2】

松山市二番町二番地第二の旧土地台帳



【資料3】

松山市二番町二番上野邸前通り

第一一五回子規忌 献詠作品

事務局

子規忌に先立って、子規・子規忌への献詠の俳句・短歌等を募集したところ、次のとおり多数の応募がありました。日頃の例会に参加できない方、遠隔地の会員の方々からもご提出いただき、子規への想いを詠み相互の交流の一助にとの願いが実現したことは、喜ばしいことでした。皆様方のご協力に心よりお礼を申し上げます。

複数の作品を提出いただいた場合は、事務局で選句し一句にさせていただきます、また順不同で掲載させていただきます。失礼がございましたら、お許しくださいさるようお願い申し上げます。

（俳句）

いまそかりせば何こと問はむ獺祭忌
 あんぱんに大きな臍や獺祭忌
 はからずも百二歳なる獺祭忌
 まなうらにベースボールの声近し
 敦盛の蕎麦喰ひ偲ぶ獺祭忌
 カツオドリ真つ青の中矢の如く
 師を偲び待たるる事典子規忌日
 平和ボケ足るを知るべし日韓丸

子規堂や秋茄子の図に句問答	新居浜市	畝川堯子
子規の忌の海原濡れてあたりけり	東温市	白石かがり
まだ濡れてほのぼの垂るる糸瓜かな	伊予郡	溝口耶枝
三佳書のゆくへ究めむ獺祭忌	西予市	乾 燕子
おいらくのあしなへ竹の里人忌	西予市	乾 歌子
筑波嶺に歌垣しのぶや恋重荷	伊予市	宇都宮弘之
寝む人に子規の横顔へちま棚	宇和島市	港 権平
子規愛でし柿の色紙は父の作	松山市	井手康夫
線香を点じ子規忌の遺髪塔	松山市	中矢えり子
子規会を避けて吹かまし秋台風	松山市	赤松宜子
秋風や孫を遺して天國へ	松山市	渡部龍一郎
木枯や八重律の声かと根岸庵	松山市	宇都宮良治
芋坂の羽二重団子や獺祭忌	松山市	矢野勝三
杖を曳く齡となりて獺祭忌	松山市	松本博之
夢紡ぐ子規魂に肖りて	松山市	武田峰松
ゆかりの地訪へば子規忌の風が吹く	松山市	中野匡子
獅子稽古舞へぬ幼児振り真似る	松山市	仙波光彰
横顔の若き古切手子規忌かな	松山市	西原ちづ子
月明に潮待つ船や子規の旅	松山市	黒田耕風
浴槽の情句を永遠に獺祭忌	松山市	平本故淵

子規さんへ一献捧ぐ獺祭忌

松山市 森 慎吾

糸瓜忌や髪塔に掌を合わせける

松山市 戸田政和

干柿と葡萄を添えて子規忌かな

松山市 村上愛子

ぶらぶらとノッポやデブの糸瓜かな

松山市 越智泰子

駅に近き子規さんの墓地萩の風

松山市 土居桂子

つゆ草を描きぬ雨の獺祭忌

松山市 福井みどり

夏休み子規さんめぐりさあ三坂へ

松山市 今井道子

最後の従兄弟牛夫氏卒寿に子規祀る

松山市 乃万美奈子

燦燦と陽を返しをり石榴の実

松山市 原田明美

子規在りせば内子富有柿捧げまし

松山市 松浦巻夫

糸瓜忌や絶筆三句読みかえし

松山市 戸梶元齋

絶筆三句讀んじて見る獺祭忌

松山市 浅海好美

極堂と為山が創刊「ほととぎす」

松山市 高橋俊夫

露の世の子規いとほしやはるかなる

松山市 平岡 英

子規居士の散策道や野菊咲く

松山市 今村 威

《会員以外の方の献詠》

ガラス戸の前に地球儀子規忌かな

松山市 岡本亜蘇

この畦道の子規に連なる雑草

松山市 堀口路傍

愚陀佛庵の五十二日や燃ゆる秋

松山市 太田震砂

結婚のネタは封印子規忌かな

松山市 大森恵子

青空へ近づく山路野菊濃し

松山市 多田美江子

秋の夜ほくが作った玉子焼

松山市 浅海颯斗(十一歳)

秋の空ペンキぬりたて気をつけろ
子規の忌の海からの風わたり来る
妻にまた叱られている獺祭忌

松山市 浅海春奈
松山市 田村七重
松山市 小西昭夫

《短歌》

獺も魚を祭りて祈るごと

東京都 福田安典

今年もしるき居士が糸瓜忌

勝山の天守に登り見晴るかす

伊予の高嶺にかかる白雲

神戸市 水川景三

人類の幸福経済発展なりと

地球はかい足るを知れ

河内長野市 文東載

灼熱の庭に開きし秋海棠

はじめて絵にせし子規し思ほゆ

四国中央市 山上茂次郎

萩こぼれ秋海棠咲く我庭に

根岸小園居士偲ぶ今朝

松山市 烏谷照雄

体調悪しく出席叶わぬ糸瓜忌の

盛会を祈るただひたすらに

松山市 赤松宜子

耐え忍ぶ定めのを操りて

誠織り成す尊き歩み

松山市 武田峰松

野ボールは正岡子規のペンネーム

野原の野球に秋の声澄む

松山市 越智泰子

子規博の愚陀佛庵の床の間の

桔梗静かに主を待ちけり

松山市 福井みどり

庭常の数枚の葉よ子規居士の

墓碑をやがては包み守らむ

松山市 藤森美枝子

常盤舎の甍に上る若人ら

思いぞ届け雲の峰まで

松山市 佐伯 健

〈漢詩〉

第百十五回子規忌書感

松山市 寫川武彦

黎明日本一麒麟

黎明の日本一麒麟

每與詩文筆有神

毎に詩文と与にしてひつに神あり

今會僧堂門下輩

今僧堂に会す門下の輩

追懷尚慕意中人

追懷し尚慕う意中の人

〈短詩(短文)〉

いつも会誌をお送りいただきありがとうございます。作品募集のお知らせ大いに賛同、俳句と短歌を送ります。

神戸市 水川景三

昨年急逝されました和田克司先生の六月一日、病床よりのメールは、子規新資料の事でした。最期まで子規を愛し、研究者としてご指導に命を燃焼されました。子規忌に偲ぶ心が重なります。

東京都 今井田敬子

宝蔵寺 茂吉歌碑

(松山市道後湯月町五一―四)

平成二八年五月一四日、新しい本堂が落成した宝蔵寺には、八基の文学碑がある。山門を入って正面の本堂に向かうと、その右側の前庭には、五基の碑があり、その中央に位置するのが茂吉の歌碑である。

斎藤茂吉(明治一五・一八八二―昭和二八・一九五三)は、山形県出身で、親戚の精神科医斎藤藤紀一に招かれ、東京大学医学部に学んだ。同期に日赤松山病院院長を務めた俳人の酒井黙禅がいた。明治三八年、二三歳の時、子規の『竹の里歌』に触発されて、本格的に和歌を学ぼうと志したが、子規が既に没していることを知って、大いに落胆したという。アララギ派の伊藤左千夫に師事し、子規の写生論を深めた「実相観入」(自然と自己一元の生を写す)という一種のアニミズムともいえるべき歌論を確立する。その例が歌碑に刻まれた次の短歌である。

安か、かと一本の道 通り多里

靈剋る 和可命奈りけり

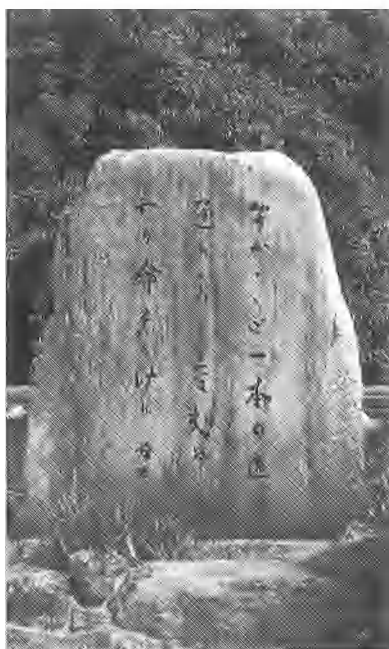
(大意) 夕陽に照らされて、あかあかと一本の道が、真つ直ぐに通っている。これこそ我が人生を生きる姿なのだ。

東京代々木が原で見た秋の夕陽に照らされた一本の道のイメージと、一つの信念を守って孤高に生きる自分の人生行路を重ねたものといわれる。第二歌集『あらたま』(大正

一〇・二九二）の「一本の道」連作八首のうちの第一首である。

筆跡は茂吉の自筆。昭和一二（一九三七）年五月二〇日に、茂吉が宝厳寺に参詣したことに因んで、平成二（一九九二）年、茂吉に師事した山上次郎氏が、茂吉の遺髪を埋めて建立された。斎藤家の意向で、茂吉の歌碑は自筆に限るとされ、自筆がない場合は明朝体を用いることになっているので、この歌碑は貴重である。

（今村威記）



一郎先生が、本会にご入会くださることにになりました。先生は、子規研究を深めておられ、前号でもご紹介しましたが『子規庵・千客万来』『子規のいる風景』『子規のいる街角』『余は、交際を好む者なり』など多数のご著書があります。これからのご指導、ご活躍をご期待申し上げます。

○新入会員の紹介

- ・今井 捷之様 松山市山越
 - ・村上 空山様 松山市御幸
 - ・森岡美枝子様 松山市宮西
 - ・石原 敏男様 松山市正円寺
 - ・今村 善也様 松山市北斎院町
 - ・今村 明美様 松山市北斎院町
 - ・星川 一治様 (賛助会員 四国中央市)
 - ・玉置 泰様 (賛助会員 松山市)
- ご入会いただき、ありがとうございます。今後のご活躍をご期待申し上げます。

○子規事典編集記録 (3)

五十音順」の原稿はほぼ集まりました。「子規作品抄」は只今原稿依頼中。十一月中に素材が揃うかどうか。これから山場が続きます。

（編集委員長 平岡英）

【短信】

○復本一郎神奈川大学名誉教授 本会にご入会

宇和島市にご出身で神奈川大学名誉教授・国文学者の復本

【訂正】

本誌一五〇号に次の誤りがありましたので訂正します。

○ p 265 下段2行

《訂正前》 野志克人松山市長

《訂正後》 野志克仁松山市長

○ p 116 上段10行

《訂正前》

early spring listening the murmur of shallow

a white heron

《訂正後》(英語俳句は3行書きに)

early spring —

listening the murmur of shallow

a white heron

○ p 116 上段19行

《訂正前》

baby clothes drying white ume flowers in sunlight

beginning to bloom

《訂正後》

baby clothes drying

white ume flowers in sunlight

beginning to bloom

子規会誌 第一五二号

(会誌季刊 四、七、十、一月)

発行日 平成二十八年十月十九日

発行 松山子規会・会長 井手康夫

編集 松山子規会・編集部 渡部平人ほか

印刷所 不二印刷株式会社

電話 〇八九一九七三―二六六

子規会誌希望・入会等連絡先

松山子規会事務局・寫川武彦

〒七九〇―〇九三三

松山市北久米町二一六一―

電話 〇八九一九七六一六四三三

郵便振替 〇一六二〇一七一―八六八

(定価・四一〇円)

◎松山子規会

〈松山子規会は次の皆様に賛助会員としてご支援いただいております〉

(敬称略・順不同)

・伊予鉄道株式会社	〒790-0012 松山市湊町4丁目4-1	TEL089-948-3222
・株式会社愛媛銀行	〒790-0878 松山市勝山町2丁目1	TEL089-933-1111
・愛媛信用金庫	〒790-0002 松山市二番町4丁目2-11	TEL089-946-1205
・生活協同組合コープえひめ	〒790-8543 松山市朝生田町3丁目1-12	TEL089-931-5201
・四国電力株式会社	〒790-8540 松山市湊町6丁目6-2	TEL089-946-9706
・学校法人河原学園	〒790-0001 松山市1番町1-1	TEL089-943-5333
・株式会社サンメディカル	〒798-0013 宇和島市御幸町1丁目2-13	TEL0895-25-2880
・梅錦山川株式会社	〒799-0123 四国中央市金田町金川14	TEL0896-58-1211
・えひめ洋紙株式会社	〒791-8036 松山市高岡町455-1	TEL089-973-9200
・医療法人聖光会鷹の子病院	〒790-0925 松山市鷹子町525-1	TEL089-976-5551
・長谷川歯科医院	〒791-8022 松山市美沢2丁目6-23	TEL089-925-7600
・久米病院	〒790-0924 松山市南久米町723	TEL089-975-0503
・南海プリント株式会社	〒790-0051 松山市生石町449-3	TEL089-943-0770
・有限会社日新商会	〒791-8044 松山市西垣生町802-12	TEL089-971-6633
・株式会社 時の名所 ふなや	〒790-0842 松山市道後湯之町1-33	TEL089-947-0278
・大和屋本店	〒790-0842 松山市道後湯之町20-8	TEL089-935-8880
・株式会社四国道後館	〒790-0841 松山市道後多幸町7-26	TEL089-941-7777
・不二印刷株式会社	〒790-0054 松山市空港通2丁目13-10	TEL089-973-1266
・巴製菓株式会社	〒790-0842 松山市道後湯之町13-7	TEL089-941-3452
・紀の国屋食堂	〒790-0012 松山市湊町5丁目3-5	TEL089-945-1309
・癸丑吟社	〒790-0923 松山市北久米町1161-1	TEL089-976-6432
・古書 猛牛堂	〒790-0854 松山市岩崎町2-6-34	TEL089-948-8137

(平成28年9月末日現在)